

4 充たされざる者

1 構成

1～3 8段落で成立している。大きく四つの部分に分けられている。その中で行間を空けた箇所がある場合、1～2の節に切った。

I 1～10

II 11～20

III 21～27

IV 28～32

I

1

1

時 場所 ホテル フロントデスク無人

事件

タクシー運転手は出迎えがないので戸惑う。わたしのスーツケースをエレベーターの前まで運び、置くと立ち去った。

時 場所 ロビー

事件

制服姿の若い男がチェックインの手続きを始めた。支配人ホフマンは会議に出ていると断る。

時 場所 マレリー《垂直性》第二楽章の一節

事件

ピアノの音を聞く。フロントマンは〈木曜の夕べ〉の準備にブロツキーが練習していると説明する。

時 場所 談話室貸し切り

事件

ブロツキーがそこでピアノを弾いている。

部屋に案内を告げる。

時 場所 エレベーター

事件

年配のポータースタッフがスーツケースを取り上げエレベーターに入ってきた。

2

時 場所 エレベーター ホテル 一人世紀 フリードリヒ大王一泊

事件

スタッフは思いスーツケースを二つ持ったままだ。置いた方がいいと言うと、スタッフは十五年間そうしていた、このホテルには二十七年働いていると答える。

時 場所 スイス・ルツェン

事件

グスタフは妻と短い旅行をし当地ではポーターに敬意が払われていることを知る。スーツケースを床に置かずに持っていることを心がけるようにした。今の姿勢を改めるべきと十二人で仲間を作った。

時 場所 毎週日曜午後 ハンガリアン・カフェ

事件

ポーターのグループが集会を持つ。若い頃はスーツケースを三個まで持ったが、四年前体調を崩しできなくなる。

時 場所 エレベーター

事件

ヒルデ・シュトラットマンは、グスタフを尊敬している。テーブルの上でダンスを踊ると言う。グスタフは重さで膝は沈み肩もふるえている。シュトラットマンは順調にはこぶようにする。ハードスケジュール、町に崇拜者が多い、世界最高の現役のピアニストと告げる。たくさんの人に直接会えるように組んだ。

時 場所 ドアの前

事件

スケジュールに不満な点がないか覚悟しておきたい言うと言っているとバランスが取れていると思うと答える。

時 場所 部屋

事件

今の会話はどういう意味があるかと思う。グスタフは部屋の説明をする。プロ意識に徹している。娘と孫のことを心配している。

時 場所 数カ月前

事件

毎週一度は午後、グスタフはボリスと散歩する。その間ゾフィーは自由になる。

時 場所 数週間

事件

ゾフィーは機嫌よく二人を残して出かけた。

時 場所 最近

事件

何もやる気がないようにうなだれて立ち去る。ボリスに影を落とす。グスタフはこれにショックを受けた。気にかけてわたしはグスタフに好感を抱き同情する。

時 場所 部屋

事件

わたしは服を着たままベットに倒れ込んだ。グスタフの悩みのこと、スケジュールのこと

で一杯だ。町はリサイタル以上のものを期待している。スケジュール表も受け取っていない。

時 場所 イングランドとウェールズの境にあったお婆の家

事件

この部屋をお婆の家で両親と二年一緒に過ごした寝室ではないかと思えた。

時 場所 ある日の午後

事件

六つか七つの時、階下で猛烈な口論が始まった。並みの喧嘩ではない。飛行機の長旅、スケジュールをめぐる混乱、グスタフの抱える問題が消え去っていくように思われ眠りに落ちた。

2

1

時 場所 ベッド脇 電話

事件

支配人のホフマンが、歓迎している、ロビーで待っていると言う。会うのが楽しみと電話を置く。

時 場所 夕方

事件

疲労感を覚える。ロビーへ行くしかない。

2

時 場所 エレベーター ロビー

事件

ホフマンは五十がらみ、背が高く太っている。〈木曜の夕べ〉の手筈は万全と言う。なれなれしい。話したいことがあったのではないかと言うと、妻はライダーを崇拜し追いかけをしている。記事の切り抜きがアルバム二冊あるので目を通してほしいと頼む。

嬉しい喜んで見せて貰う、ハードスケジュールだが見るくらいの時間はあると答える。都合がよい時、合図して貰って見て貰うと言う。

時 場所 ロビーの外れ 談話室

事件

ホフマンはブロッキーが貸し切りで練習している。今朝はオーケストラと四時間リハーサルしたと言う。

時 場所 アナトリウム 噴水

事件

コーヒーが飲みたくて彼を無視してバーへ行く。一人になり物思いにふける。あるサッカーの試合の選手の名前を思い出そうとすることができない。

時 場所 噴水の音

事件

シュテファン・ホフマンは二十代前半のうまい青年だ。来ていただいて嬉しい、尊敬していると言う。彼は支配人の息子、アマチュアピアニストと自己紹介する。(木曜の夕べ)に出るので、ピアノを聴いて助言してほしいと頼む。わたしは引き受ける。スケジュールが厳しいので時間を見つけなければならないと答える。

ポケットベルが鳴り、彼は早足に去る。わたしはくつろげない。この町で多大な期待をかけられている。シュトラットマンに要点をはっきりさせて貰おうと思う。

グスタフは旧市街地の散策を勧め、ボリスとゾフィーの仲が心配なのでゾフィーに声をかけてくれ、ゾフィーとは何年も口をきいていないと頼む。

わたしは家族の問題を断ると途方に暮れているとせがまれ引き受ける。

3

時 場所 旧市街地 ハンガリアン・カフェ テーブル

事件

わたしの名を呼ぶ声に振り返ると男の子を連れた女性が手を振った。ゾフィーは四十才位、長身、長い黒髪の魅力的な女性だ。ボリスは不機嫌だ。彼はボーイジャーがどう飛んでいくか説明していたと言う。わたしは空港機に興味があると話を向けると、ロケットだと拒絶する。グスタフのホテルに泊まっていると言うと、初めて興味をもってわたしを見た。

ゾフィーは家のことで電話があった、見に行かないかと誘う。ゾフィーの顔に見覚えがある気がして、家を買う話をしていたことまで記憶にある気がする。

時 場所 テーブル 空席

事件

ボリスはどこへ行きたいか聞くと、ゾフィーはブランコ公園と答える。

時 場所 広場 石畳の通り

事件

ボリスは祖父を自慢する。いい友達と相槌を打つ。

時 場所 一週間前 ホテル

事件

歩き続けていた時、口論の一切を思い出した。わたしは必要とする人がいる、着くと問題が待ち構えている、と言うと、他の人にやって貰え、その人達は自分で自分の問題が解決できないと思う。わたしはここに必要な人間だ。

時 場所 柵に囲まれた小さな公園 ジャングルジム

事件

ボリスは送り出す。ゾフィーは家の居間の説明を聞いている時、幼い頃のアパートの光景が浮かんできたと言う。

時 場所 日暮れ

事件

ボリスはジャングルジムの頂上で鉄棒を握って回転した。ゾフィーはあれが自慢でと言

う。

わたしはホテルの部屋からホテルの部屋へ移動する。わたしに多大な期待をかける。

時 場所 中世の礼拝堂の先 歩いて数分

事件

ゾフィーはアパートへ誘う。わたしはあの疲労感に襲われる。

時 場所 細かな雨 肌寒い 公園から裏道へ

事件

ボリスは私と手をつなぎ、ゾフィーの後を追った。

4

時 場所 旧市街 レンガの壁

事件

ゾフィーは足取りを緩めた。ボリスはついて行きかねた。わたしの手を引っ張る。九番と
言うのでサッカー選手かと尋ねる。ゾフィーは姿を消す。距離は遠くなった。ゾフィーはま
た視界から消えた。坂を下り切って見上げて待っていた。追いつけずに困っていたのが分か
らないかと怒るとボリスを抱きしめもうすぐと言う。話しながら抱きしめていたが急に彼
を離すと向きを変えて歩き出す。ボリスは戸惑う。

時 場所 街灯の光 路地 下り坂

事件

イングランドの学校時代の同級生ジェフリー・ソーンダースと会う。人気者で学業・スポ
ーツともトップで、模範生、いずれ総代と噂されていたが、中学五年で退学した。昔の恋が
実らなかった。一人住まいで娼婦なら大抵知っていると言う。土地勘があり案内してくれた。

時 場所 イングランドの学校時代 冬の朝 ウースターシャー

事件

十四、五才の頃二人でクロスカントリーの監視をやった。学校一の人気者で傷つきやすか
った。

時 場所 暗い夜道

事件

一緒に歩く。ボリスは小石を蹴る。ジェフリー・ソーンダースは、その調子だ、九番がポ
ジションだと言う。どこのチームか尋ねるが一番好きな選手と言うだけだと答える。

時 場所 広大な野原との境界

事件

迷ったようだと言うと、ここからそう遠くない所に住んでいると答える。住所も聞いてい
ない。中世の礼拝堂の近くだ。この先かと尋ねると住んでいるのはプロツキーだけだと答える。
プロツキーはオーケストラを指揮するそうだが信じられないと言う。バスに乗ればいい
と教える。

時 場所 農場 郊外の住宅地 家並み

事件

ボリスは、九番は世界最高の名選手と言う。わたしはそうだと答える。彼はどっちも行っていることが分からない、息子の頭にでたらめを吹き込んでいる。あの年頃では仕事を始めなければならないと言う。わたしは、みじめなわびしい独り者に何が分かると肩を突き飛ばした。彼は急にしゅんとなった。バス停まで連れて行って貰うには彼だけが頼りだ。

時 場所 小さな村の広場 数軒の店の前

事件

ジェフリー・ソーンダースは、あそこで待ってる。おれは帰る、しばらく待てばバスは来ると言う。

時 場所 二軒の家にはさまれた路地

事件

彼を見送ってからバス停へ歩き出した。

5

時 場所 街灯の下

事件

ボリスは身をすり寄せてきた。バスはもうすぐ来る。待てばいいってあの人が言ったと言う。

時 場所 咳ばらい 車

事件

シュテファンは、用件をすます間五分待ってくれ、ホテルでジャーナリスト達がライダーを待っていると言う。わたしは彼らと約束があったような気がした。

時 場所 大きな白いアパート 玄関ホール

事件

年配、銀髪の実・コリンズは相談にのると言う。プロツキーの回復に重要な鍵になると言う、レオの扱いに手を負っているのかと言う。彼は一人で練習していると言うと体を揺らしているだけと答える。動物園に連れて行くので励ましの言葉をかけてほしいと頼む。

ボリスは目を覚ましていた。どこか悲しげだ。タイル貼りはやったことがないので風呂場を直せないと言う。ホテルに行った方がいいと言う。わたしは予定変更しようと言う。

6

時 場所 大きな白いアパート 玄関のドア開く

事件

ミス・コリンズがシュテファンを送り出す。彼もホテルに戻ることに賛成する。少し練習するので聞いて感想を述べてと頼むが、疲れていて眠いからと断る。

時 場所 夜の街 雨

事件

シュテファンは数年前の出来事を思い出す。母の誕生日、ドイツに留学していた大学時代

帰宅し車回しに車をとめ数時間思い悩んだ。父が中に入れようとして、母さんは機嫌がいいと言った。母と二人きりになり、母の機嫌をそねないか恐れた。母はにこやかだった。

時 場所 食堂

事件

シュテファンの面白い話には父は笑い、母も笑い大声を上げた。父の求めにマレリー《外ひ線》を弾いた。二人は身じろぎもせず座っていた。弾き終わった時二人とも彼を見ていなかった。女中はステキと言って二階へ上がろうとした。二人は階段を上がって行った。

時 場所 ハイデルベルグ

シュテファンは徹夜で車を走らせアパートに帰る。席にいれば父が母の機嫌を直させると言う難業を邪魔することになる。こっそり出た。

時 場所 食堂

事件

父は下りて来た。もう少し長くいられると思ったが講義があるのかと言った。シュテファンは母が楽しんでくれたらいいと言い、父は深い悲しみの表情をし、わざわざ帰ってこれて嬉しかったはずだ、わたしから話しておこうと言った。

時 場所 閑散とした幹線道路

事件

シュテファンはその晩のことを一つ残らず思い返していた。その後何度も思い出すことに到った。思い起こすたびに苦悩は薄らいだが、〈木曜の夕べ〉が近づいた今、昔の恐怖がよみがえり、車を走らせていて、この夜もあの辛い晩に逆戻りしていた。

わたしはこの青年が気の毒になり、演奏を両親は正当に評価していない。演奏を楽しんで満足と意義を見いだすといいと言った。

時 場所 四才

事件

シュテファンは母の行動は少し無神経に映る。四才の時ティルマフェスキー婦人にピアノを習ったが、弟子を厳選しており師事できたのは幸運だったと言った。

時 場所 数年間

事件

みるみる上達した

時 場所 十才

事件

練習をしなくなった。夫人は指導をやめた。破門された時から何ヶ月も二人が口をきかないようなよそよそしさが始まった。

時 場所 十二才

事件

夫人に再び師事し、練習を重ねた。

時 場所 ピアノコンクール

両親は出来が悪いことに気づいた。二人は二カ月のブランクがどれだけマイナスだったか痛感した。母は無意味と考え、父はそれでも希望を持っていた。

時 場所 車 大通り

事件

半年前父は〈木曜の夕べ〉に出ることをすすめた。信頼してくれていることに心動かされやるよと言った。

わたしは勇敢で正しかったことを願っていると言った。

時 場所 ホテル 玄関

事件

わたしとボリスは車を下り入って行った。シュテファンは車を裏に回しに行く。

7

時 場所 ロビー照明落ちる ひっそり

事件

フロントマンに近くにもう一つ部屋をとりたいたいと言う。グスタフのためと告げた。

時 場所 屋根裏部屋

事件

グスタフを電話で呼ぶ。フロントマンはジャーナリスト達は一時間前に帰った。ミス・シュトラットマンと交渉してくれと言った。彼女は何度も要人の世話をした。

時 場所 ストックホルムの放送

事件

ラジオも聞けるし、映画も見られる。

時 場所 電話

事件

ゾフィーが、ライダーとボリスが入って行くところを見たというのに今何をしているつもりだと怒る。

時 場所 アンティーク・ショップの正面のアーチの下

事件

どこにいと聞くと、通りを隔てて向いと答える。

時 場所 エレベーターのドア

事件

グスタフがボリスを連れて来てくれたと喜ぶ。ゾフィーと話になったか気をもんでいると言う。娘が何を悩んでいるか何かにおわせたかと尋ねる。部外者には難しい、グスタフが話すのが一番と答える。

時 場所 ゾフィー ハオ十オ

事件

二人はしじゅう話していた。

時 場所 八才 台所

事件

柵を作ろうとし、ゾフィーが手伝おうとしたのに一言も口を聞かないので娘は当惑し、怒った。

時 場所 アルバ・ホテル

事件

早く帰るがゾフィーは迎えずそっぽを向いて出て行った。

時 場所 夕食後

事件

妻と夕食を取った後、娘は一言も口をきかずにベッドへ行った。それが始まりだった。

時 場所 十一才

事件

ゾフィーが飼っていたハムスターが亡くなり泣きじゃくった。グスタフは大きな音量でラジオを聞いていて、叫び声が聞こえないふりをした。ゾフィーは聞いていたのを知っていた。

二人の了解を続けた。わたしは二人の了解という問題こそがゾフィーの悩みの核心という可能性はないかと言うと、グスタフは今まで思いもしなかったことだと答える。娘はなぜ今二人の了解で悩む必要があるのかと首を振る。わたしはこの一切から手を引きたかったが、できるだけことはやってみると引き受ける。

ボリスは私から離れグスタフに近づいた。グスタフはボリスを部屋に連れて行く。

8

時 場所 街 人通りない 静まる アーチの下

事件

ゾフィーが現れた。申し訳なさそうになり冷静な口調で怒ることもないと言う。夕方の行動のことを言っていると言うと頼りにしてるって分かっていたと答える。二人が来たので計画していたことをどうでもいいと思っていると判断した。

出て来たのは映画を見たかったからだと言うと付き合うと言う。家が見つければいい方に向かう、二人で映画に行くのは何年ぶりかだ。

時 場所 ロビー・入場券

事件

急がないと席がなくなると怒りがこみ上げる。ゾフィーは探しにホテルへ行ったのではなく、グスタフにコートを渡すためだと言う。向かいに立っていたので電話した。そうしてくれてよかったと答える。

時 場所 売り場

事件

ゾフィーはアイスクリームをわたしはぼろぼろの手引きを持って離れた。ボリスのことを気にかけてくれたと礼を言う。

時 場所 《二〇〇一年宇宙の旅》クリントイーストウッド ユル・布林ナー

事件

わたしが大好きな作品の一つだ。ゾフィーは映画を見ている。わたしは暗闇の中である記憶の断片がよみがえってきた。出来事を強引に思い出している。わたしは新聞を読んでいた。

時 場所 六、七年前

事件

ボリスはクレヨンで画用紙に絵を描いていた。スーパーマンが上手に書けた。ゾフィーが立って、彼はあなたの子じゃない、あの子に本物の父親らしい気持ちなんか持つはずがないと言う。

時 場所 隣の部屋

事件

出たり入ったりした。わたしは傷ついた気持ちといらだちを覚えた。

議員のカール・ペダーソンが市議会の一員として迎えて嬉しい、プロツキーは午後三、四時間リハーサルをしたと言う。わたしはお会いできて嬉しいと答える。

クリストフは町が空隙の時期に来た。画家のバードと名作曲家のフォルメラが亡くなった時期だ。はじめ謙虚だったがワンマンに振舞うようになった。町は危機に直面している。

時 場所 映画

事件

クリントイーストウッドが地球にいる妻にマイクで話しかける。クリストフは何年前に来たかと聞くと十七年と七カ月と答える。

時 場所 館内

事件

ペダーソンは小声で詫びを言うなり座席の間を進んで行った。わたしも立ち上がって通路へ向かったがお祭り気分のようなものが漂っていた。わたしは通路へ出た。

9

1

時 場所 映画館

事件

わたしは観客をかき分けて進んだ。ペダーソンがライダーと言って立ち上がり、握手攻めにした。古き良き時代この町はすべてすばらしかったと言う。

クリストフはプロのチェロ奏者、華々しい経歴だった。ローザ・クレナーはこの町の出身で美人で有名人が来ると追いかけた。クリストフと結婚し十六年間夫人だった。次はプロツキーを狙うかも知れない。

ペダーソンは我々は転機にある。ライダーはそれを告げるために来たという。わたしはあらゆる立場の意見を伺いたいと言う。

時 場所 スクリーン

事件

クリントイーストウッドがハルを解体しようとしている。

2

時 場所 夜の街 静か 寒さ 霧

事件

ペダーソンは、ブロッキーを受け入れることは難しい。彼は祖国で指揮者だったが、町で演奏すること、音楽の話をするのを聞いたことがないと言う。最近まで酔って千鳥足で歩いている。

時 場所 図書館

事件

犬を連れて入り、館内の雰囲気をはらりと変えた。

時 場所 十字路

事件

立ちどまり、ホテルまで送ると言う。

時 場所 二年前の先月 伯爵夫人の屋敷

事件

十一人集まりレコードを聞いた。夫人は長い間誤った道を歩んで来た。クリストフには前向きな措置を取る時期だ。ブロッキーは酔っ払いだと批判した。

時 場所 レコード 年代物

事件

ペダーソンは渴望していた本物の音楽を三時間聴いていた。ブロッキーはお願いするのはばかばかしいと思った。夫はブロッキーにどの程度の技量があるか確かめたければと言う。ホフマンは再起に見込みがあるなら尽力すると言う。ペダーソンはイメージをよくするところまできたに過ぎない。わたしはスピーチは下調べさえすんでいない。映画館でも注目をあびる発言が一つもできなかった。

時 場所 ホテル

事件

10

時 場所 電話

事件

眠りについてまもなく電話が鳴る。ガウン姿でロビーに行く。ホフマンはブロッキーの犬のことで悪い知らせがあると言う。

時 場所 外暗い 雨 駐車場

ホフマンは大きな黒塗りの車を出した。わたしは後の席に座った。

時 場所 大通り 混雑

事件

ホフマンは交通事情はひどくなるばかりと言う。

時 場所 交通量減る

事件

ホフマンはスピードを上げた。ホテルの部屋は満足か尋ねる。

時 場所 暗闇 猛スピード

事件

ホフマンは、ブロツキーの愛犬ブルーノが死んだ。孤独を紛らわす手段が必要だと言う。わたしは贈り物に別の犬をあげたらと提案する。

時 場所 鉄の門 堂々とした屋敷の中庭 たくさんの車

事件

メイドがドアを開けホールへ招く。

時 場所 大広間

事件

パーティーは佳境に入っていた。客は百人いる。夜会服を着ている。伯爵夫人はぐるぐる回っているだけで誰にも紹介しようとしめない。

時 場所 今夜の会

事件

ブロツキーを主賓に開いた大がかりな晩餐会だ。〈木曜の夕べ〉を目前に控えた最後の機会になる。客は全員この街のエリートを自認している。

時 場所 ブロツキーの愛犬の知らせ

事件

ブロツキーに対する突拍子もない噂が駆けめぐる。絶望的な会話が交わされ始める。

時 場所 広間の中央 叫び声

事件

獣医ケラーは最善を尽くしたと叫んだ。若い議員は飛びかかっていこうとした。

時 場所 広間

事件

役人ヤコブ・カニックは犬が死んだことは困ったことだがそれでおしまいではない。ブロツキーを元に戻せばいい、彼をおいて頼れる者はいない、励まさなければいけないと言うと賛同のざわめきが起る。

ホフマンとわたしが到着したのは、ヤコブ・カニックが話し合えて三十分後でなごやかな談笑を感じた。

時 場所 広間の反対側

事件

シュテファンは〈木曜の夕べ〉の演奏曲でどちらにしたらいいか相談する。父は《ダリア》に満足している。母は《ガラスの情熱》を楽しみにしている。母は《ダリア》を嫌っている。

わたしは出る幕ではない、自分で決めること、準備してきた曲を変えないほうがいいと助言する。

ミス・コリンズは芸術的な完成度のためと言う。わたしは現実的立場から言っている、この段階では遅すぎると言う。彼女はシュテファンの力量を知らないのにどうして断言するかと口出しする。わたしは不愉快になり、客達の中へ入って行く。

時 場所 広間

事件

ふらついているとホフマンが犬のことは別の者に話させる。スピーチを変更しなくていいと言う。

時 場所 玄関の反対側 大きな物音

事件

ブロツキーが広間に案内されて来る。彼は無言で年老いていて長身でぎこちない。タキシードを着ている。

時 場所 大広間 静か 新たな緊張感

事件

犬についてお悔やみを述べれば、私のスピーチは気楽なものになる。客の数はかなり少なくなった。

時 場所 ダイニングルーム

事件

私は立ち上がった。広さに驚いた。スピーチを二案考えた。

時 場所 四人のテーブル

事件

わたしは案内されて着く。若い女性がどなたかがあの席へ行ってお悔やみを言うべきと提案する。ブロツキーは酔っていない。気乗りしない様子で淡々と食事を続けていた。

時 場所 デザートが終わる頃

事件

ホフマンがブロツキーが挨拶したいようだったが止めて来た。紳士がブロツキーにお悔やみを申し上げたい、ブルーノに黙祷を捧げようと言い、冥福を祈って一分間黙祷した。ブロツキーはじっと座っていた。

時 場所 線路とシルド通りの間

事件

大柄な男が配達の仕事をしていて路地の中程に死骸を見つけた。肩に担いで前足を体の前に突き出して運んだと報告した。

タキシードの男が記念の銅像を建てようと言うと他の男が行き過ぎと反対した。わたしは咳払いをして立ち上がる。ガウン前がはだけて裸体がのぞく。通りに名前をつけるとか、あの犬は厄介者だとか意見が出る。

プロツキーは、犬は死んだそれだけだ。私は女がほしいと言う。ミス・コリンズは失礼なことを言った、昔のことがよみがえったと言う。ピアニストを前にすると機嫌が悪くなる、救っていただく必要がないと言う。

わたしはベッドに入って休みたいと言う。シュテファンは予想外に強引な態度で連れて帰ろうとした。

時 場所 アトリウム

事件

ここがアトリウムと気づいた。シュテファンはカザンに挑戦してみる。《ガラスの情熱》を弾けるかもしれないと言うので、弾こうとした曲を考えるのは間違いだ。夜中の十一時に曲目を変えるのは間違いだと言う。

シュテファンは談話室でカザンを弾くから助言してくれ、と言う。わたしは人生には自分の決定を置かなければならないときがあると忠告する。

時 場所 談話室

事件

シュテファンは、外で聞いてくれ、可能性があるか言ってくれと弾き始めた。わたしは暗闇の中にたたずむ。音楽の中に引き込まれて行く。独創的な発想と繊細な感情に驚く。疲労感からロビーの方へ歩き出した。

II

1 1

1

時 場所 電話

事件

わたしは電話で目が覚めた。ホフマンはすばらしくウィットにとんだスピーチだったと言う。ボリスが同じホテルにいると言うと隣の三四二号に移ったと言う。

時 場所 三四二号室

事件

部屋に入るとボリスが駆けつけて来た。彼は車を運転している真似をしている。わたしは朝食を取りに行く。

3

時 場所 カフェテリア

事件

大半のテーブルが片づけられていた。到着して丸一日にもならないのにあれだけのことをした。この町の危機は謎めいた点がたくさんあった。

時 場所 食事

事件

シュテファンがやって来る。カザンは難物中の難物のピアノの曲だ。荒削りのところがあった。あの曲には時間をかけるしかない。きみの演奏はきわめて有望だ。

シュテファンは聞いていなかった。練習すれば大丈夫と言っている。貴重な言葉だ。やめようかと思うたび外に立っているかも知れないと思い、続けた。生まれ変わったような気分だ。

わたしは外にいたのは長くはなかった。十分に判断がつくまでいた。ミス・コリンズは帰る時、ブロツキーにほほ笑みを交わした。ブロツキーは新たなエネルギーを得たように練習している。一時間も酒をほしがらない。カザンのこの練習がどんな具合か報告する。

わたしは青年と話して一層満足を覚えた。朝食をとりふと気がつく男の問いへの答えを思い出そうとしている。

時 場所 飛行機の中

事件

一九八六年の決勝戦、一九七八年の試合、あと一組が浮かんでこない。

時 場所 カフェテリア

事件

ボリスが来て前のアパートへ行くのかと言う。行くなら今すぐだと連れ出した。フロントマンは記者達に一時間後に戻って来るようにとっておいたと言う。

ミス・シュトラットマンを通じてきちんと時間を決めるように伝えてほしいと言う。

時 場所 ホテル 歩道

事件

アパートにどうやって行けばいいか覚えていないと言うと、ボリスは消防署前から電車に乗ればいいと答えた。

時 場所 広い大通り 路面電車

事件

記者が不運の行き違いの連絡だった。約束の時間を何度も変更された。昨夜は二時間以上も行ったと言う。今朝も待っていたとフロントマンから聞いた。別の用件で出かけようとしている。ボリスが不機嫌なので、注文して食べていていいと言う。

時 場所 店の中

事件

ボリスはアーモンド・チョコレートのチーズケーキに決めた。あの人達と話してくる、すぐ戻ると言いかせる。

1 2

1

時 場所 中庭

事件

記者とカメラマンが熱心に話し込んでいる。ペドロはヒーローが来て撮影に出かける。サトラー館をバックにして撮ろうと言う。記者はペドロを電車で誘う。わたしは記者の後から中庭を出て電車に乗り込む。

2

時 場所 電車混雑

事件

車掌が乗車券を点検に来る。わたしは持っていないが特別な事情あると言った。車掌はきのうの夜は本当にがっかりしたと言った。その言葉にわたしは昔のことを思い出した。

時 場所 ウースターシャーの村 同じ小学校

事件

九才の頃の仲良しだったフィオナ・ロバーツだった。彼女の家のダイニング・テーブルに毛布やカーテンをたらして隠れ家を作った。

時 場所 マンチェスター

事件

わたしの家族が引っ越す前の苦しい時代のことだった。

時 場所 ある日の午後

事件

フィオナは結婚しても父親みたいになる必要はなかった。夫婦が喧嘩するのは特別なことがあった時だけだと言った。彼女の母は、あの子は小さすぎる、話しちゃいけないとひそひそ声で言った。

時 場所 回想中断

事件

フィオナが十時半まで待っていて、みんなに食事を始めてって言った。わたしはみんなぺこぺこになっていると答えた。

時 場所 九時頃

事件

インゲもトルデもアパートに来た。あなたが来ないかも知れないと思った。この団地に住んで四年になる。友達ができなくて寂しい。

インゲが呼びとめて会に招いた。仲間に幼なじみがいるということで、あなたの両親が滞在中世話をすることになった。わたしは会議と聞いてどうもてなすかアイデアを出し会った。

わたしは昨夜の一件を申し訳なく思う。アパートの出来事を語った時すまなかったと思う。年老いた両親を守らねばならない。どう世話するか不安がこみ上げて来た。

私は昨夜は予想もしなかったことが起き落胆させたらと詫げる。

フィオナは二人を歓迎するよう勤めなければならないが、育ち盛りの二人子供を抱えた

シングル・マザーには楽じゃないと言う。タクシーでアパートに向かう。

時 場所 出口

事件

腕に誰かが手をかける。ペドロが出口の通路を指さした。記者はここで下りると言う。

13

時 場所 広い部屋の真ん中 丘のふもと

事件

記者とペドロは待っていて、ここを少し登った所と言う。

時 場所 曲がりくねった険しい小道

事件

ペドロはバッグのせいで遅い。

時 場所 三つ四つ角 広大な田園風景

事件

休憩のため立ち止まる。わたしは記者の後につく。彼は強健だと言う。

時 場所 最後ののぼり 山道険しい 頂上 白い建物

事件

わたしはゾフィーに言いたい言葉で一杯だ。ペドロはカメラレンズを取り出す。用意が整い次第始めると言う。壁を背にして立つよう注文をつける。わたしはネクタイを直し、髪をなでつづけた。何カットかを撮った。クリストフが現れ昼食会出席の礼を言う。

時 場所 白い建物の裏側 長い階段

事件

クリストフについて裏側に回る。黒車が止まっている。わたしは撮影が長びいていて遅くなったと詫びた。階段をおりて行く。

現代音楽は複雑になっている。カザンもマレリーもヨシモトも専門的教育を受けたわたしにも難解だ。片田舎の住民に理解できるはずはない。

ライダーは世界の中で最も才能ある音楽家であっても、知識を土地の事情にあてはめなければならぬとクリストフは言う。

時 場所 あと二十段ほどで通路

事件

わたしは地名の事情を把握するという課題に力を注いできた。クリストフの言葉に苛立つ。

時 場所 発車

事件

クリストフは道を熟知しているようだった。

時 場所 山小屋

事件

クリストフに二人はこれとよく似た山小屋を見つけると言う。クリストフはローザとの仲は終わった。ローザはわたしが栄光の座にある限り愛することができた。地位にあるものと結婚していることが重要だった。

時 場所 大きなカーブ断崖

事件

町に来た時、人々はささやかな才能を高く評価した。教えながらひっそり暮らすことが目的だった。カザンやマレリーに親しめるシステムを紹介した。

時 場所 幹線道路

事件

昼食会に招いたのは栄光の座を取り戻そうとする窮余の一策だった。わたしの望みは遠い所へ行って音楽を続けることだ。

14

1

時 場所 道路沿い 小さな小屋

事件

ここで昼食か聞くとグループはここをたまり場にしていると答える。八、九人が食べている。クリストフはわたしを紹介する。

ルバンスキー博士は五十代半ば真っ白の上着とシャツを着ている。クリストフに声をかけるが拒否される。

ここにいるのはこの町で一番の知識人だと言って仲間たちを紹介した。ルバンスキー博士は片田舎のチェロ奏者がライダーに講義するとは見物だと言う。

時 場所 数分間

事件

クリストフは地元の実業家一族の背景を述べた。わたしはこの負け犬の田舎音楽家がわたしに講義するのは不遜な感じがすると思った。

時 場所 昨夜 映画館

事件

ルバンスキー博士はクロードがいつも問題にしている三和音の色付けのことを問題にする。三和音の色づけは前後の流れとは無関係に感情的な価値を内在しているというのは本当か？三和音の色づけはそれ自体の持つ感情的な特質などないと言うと衝撃が走った。

クロードが分かっていたと言うとルバンスキー博士は彼はきみに脅しをかけて、きみが間違っていると信じさせたと言った。

ライダーには時間がないと言われ、ボリスがカフェで待っていることを思い出した。

時 場所 サトラー館

事件

クリストフは町の事情を聞くことに興味がないのは驚きだ、専門的な知識があっても短

絡的な結論に結びつけようとするのは驚きだと言った。迎えに行った時、写真を撮っていたのを見たと言う。何人かはまさかと言う目で見つめた。

ルバンスキー博士はサトラー館ああそうだこの町はいま危機的状態にあると言う。

若い女性がカザンの循環的強弱法を放棄してはいけないか尋ねると、わたしはカザンの場合形式的な抑制はプラスにならない。循環的な強弱法も複縦線の構造もそうだと答えると尊敬の念が波のように押し寄せてきた。

クリストフがフォルダーを手に、事実はここにあると言う。フォルダーに何か入れてよければそれが事実になるという考えよくある間違いだと言う。爆笑が起こった。若い女性がわたし達と一緒に引きずり落としたりと、クリストフの頬を手の甲で殴った。ルバンスキー博士が止めたのでクリストフは叩きのめされるのを免れた。

時 場所 昼食

事件

ゲアハルトがマッシュポテトの小鉢を持って来た。子供を待たせていると断り、正面へ案内して貰う。このカフェとボリスのいるカフェは同じ建物の中にあることを思い出す。

2

時 場所 キッチン

事件

入るとゲアハルトは反対側にあるもう一つのドアを開けようとした。ボリスは不機嫌そうにチーズケーキをたいらげ、遅かったと言う。

人造湖へ行く簡単な方法を聞くとウェイトレスはあのバスに乗れば行ける、まもなく発車すると答える。

15

時 場所 バス満員

事件

乗車券を買って乗り込む。この子と一緒に座るといいと言うと、運転手は私に任せてと答える。乗客は自分の席を立てどこに座らせるか相談した。運転手は新しい乗客は特別な歓迎を受けていると答えた。二人が座ると、お菓子をくれる。ボリスはノース・ハイウェイに乗ると言った。

時 場所 後部 歌

事件

ノース・ハイウェイの道路標識を見た。男がどこで降りるといいか教える。

時 場所 バス停

事件

乗客は二人だけだった。運転手は一年に何人も溺死すると注意する。

時 場所 コンクリートの広大なすり鉢状の団地 四百戸 中央に人造湖

事件

降りてあたりを見回す。ボリスはコンクリートの階段をのぼる。

時 場所 通路 団地をめぐる

事件

とんでもなく長い時間歩いて一周した。覚えているか聞くと、前を二度通った、少し戻ったところと答える。ボリスは通路を少し引き返し、階段の前で立ちどまる。

ここかと言うが、何の記憶もよみがえらない。ドアをノックする。ボリスは、窓からのぞいて見て、箱が見えるかと言う。

時 場所 一種のバルコニー 居間兼食堂

事件

この部屋に見覚えがある気がした。

時 場所 ソファ

事件

最近増築されたと思う。

時 場所 ステレオ・ラック

事件

昔、九才の頃両親と数ヵ月住んでいたマンチェスターの家にそっくりと思う。

時 場所 隣のアパート

事件

だれも住んでいないかと聞くと、男は誰もいないと答える。数週間数ヵ月か一ヶ月空き部屋の方がましだと言う。暴力はなかった。夜遅く大声で言い争った。主人がしらふの時はまともだと言うので、あの子の前で持ち出す話ではないと言う。男は幼くない、すべてのことから守れない、様子を話をしただけだ。主人はしょっちゅう留守だ、遅かれ早かれ聞くことになる。酒が入ると残酷になった、その子に現実を知らせなきゃならないと言う。

時 場所 湖 真昼自宅 白っぽい空

事件

早足で歩いた。ボリスはあの子は怒っていた、九番を取りにいかなくてもいいと言う。

時 場所 風おさまる

事件

わたしはいつも留守にする。全世界のすべての人にとって大切な旅だ。旅ばかりの生活を続けなければならない。

時 場所 数週間

事件

ボリスは空想劇をやっている。ボリスとグスタフが前に住んでいたアパートの外のこの通路でごろつきと闘う。ゾフィーは、先月の物件よりひどい、ミス・シュトラットマンから何度も電話があったと告げる。

時 場所 カーヴインスキー・ギャラリー

事件

カーヴインスキー・ギャラリーに行くのにどのバスに乗ればいいのか尋ねると、がっしりした女性が、バスでは行けない私の車で行け、本を運んでくれればいいと言う。

時 場所 ヘルマン・ロスの店 ホール

事件

今夜の行事について思いだす。ゾフィーとボリスは一個ずつ段ボール箱を運ぶ。フィオナ・ロバーツが通り過ぎた。時間通りだなんて嬉しい、勤務時間が長びいて待たせたのでなければいいと言う。

時 場所 階段から通路

事件

フィオナ・ロバーツはドアを開けお友達を連れてきたと言った。

16

時 場所 トルデのアパート

事件

トルデは五十がらみ、小太りで白髪だ。迎え入れる。

時 場所 居間 午後の太陽

事件

トルゲはフォン・ブラウンがライダーの両親の世話をする計画を話した。ブロツキーとミス・コリンズが動物園に行く。ブロツキーが長い別離の後、初めて再会する。

時 場所 三人の話 キリンの前

事件

ミス・コリンズが一人で立つ。ブロツキーは彼女の方をこっそり見ていた。

時 場所 残りの檻があと少し

事件

ブロツキーは帽子を脱いで胸の前にし、愛の告白と謝罪をした。彼女は何気なく彼を振り返り二人はうなずきあった。ブロツキーが手を差し出した。彼は手にキスをして話した。仲睦まじい老夫婦だ。離婚はしていなかった。

時 場所 ウースターシャー 白い家

事件

フィオナと子供の頃の友情の思い出がある。ダイニングテーブルの下にもぐりこんだ。わたしは身を乗り出したがうめき声だけ、インゲとトルデはフィオナをいじめる。わたしは怒りといらだちに必死で力んでいた。力が抜け、気力も衰えへたりこんだ。フィオナは助けてくれたらどう？ どうして何もしてくれないのと責める。

インゲはライダーは帰った方がいい、今夜の会合には出席しなくてもいいと言う。トルデはわたしたちには責任がある、大事な役目があると言う。

時 場所 ドア

事件

わたしはよろよろ立ち上がり、ドアのところにとどりついて枠につかまった。フィオナは目に涙を流し、二人は激しい口調で話す。あんないけすかない男をあなたのアパートにつれてくるなんてと言う。

時 場所 玄関ホール

事件

外の通路へ飛び出した。

時 場所 階段

事件

歩いて行った。

1 7

1

時 場所 階段 カーヴインスキー・ギャラリー

事件

降りながら時計を見る。ぎりぎりの時間、今夜の重要な催しに時間通りにつかなくてはならない。

時 場所 一階 駐車場 人造湖の反対側 夕日

事件

がっしりした女とボリスが荷物を積んでいる。道筋が分からない。

時 場所 小屋

事件

歩いて行って管理人に聞く。かなり複雑だ、赤い車を追いかける、近くに住んでいてここまで通っていると教える。

時 場所 団地 モミの森 ハイウェイ

事件

赤い車が目に入った。夕日を眺めおだやかな気持ちになる。ゾフィーとボリスもじっと夕日を見る。ボリスはセンターラインに近過ぎると注意する。ゾフィーは軽食を取れば冷静になれると言う。

時 場所 山の中 森の中 休憩所

事件

スピードを落とし内側の直線に入る。

時 場所 駐車場 夕日真っ赤

事件

ボリスはターザンのような雄叫びをあげ、胸をぼこぼこたたたく。

2

時 場所 ロビー カフェ

事件

ゾフィーとボリスは飲み物と軽食をテーブルに並べ始めた。ゾフィーが今夜は人気者になると言うのとボリスは満足したらしく笑った。ゾフィーは自分自身の行動が、わたしたちが急いでやるのを少なからず妨げていることに気づいていた。

時 場所 セルフサービス カウンター

事件

トレーを取ったが、赤い車が今も遠ざかっていると思い、トレーを戻しテーブルに戻ろうとした。

時 場所 近くのテーブル

事件

中年の婦人二人がわたしたちのことを話している。シュトラットマンは下見に見えるというのにまだ見えない。全員と逐一打合せしたかった。これまで以上に彼女に連絡した方がいいとロビーへ急いだ。

時 場所 電話ブース シュトラットマン

事件

確認したいことがある、カーヴインスキー・ギャラリーに向かっていると言う。何もかも順調と答える。コンサートホールの下見はどうか？ご自身で下見する時間はあまりとらなかつた。両親のための配慮が必要だ。医療スタッフを控えさせてであると答える。礼を言い離れた。

時 場所 遠い奥のテーブル

事件

会話を反芻した。時間に遅れそうなので出かけると言う。ゾフィーは、ボリスはこのドーナッツがおいしいと言っていると言う。

時 場所 カフェの出口

事件

遅れると出口に向かった。

1 8

1

時 場所 急坂の道路 ハイウェイ

事件

赤い車を追う。

時 場所 数分後 広大な田園地帯

事件

赤い車が目に入った。

時 場所 夕暮れの畑 木々 集落

事件

ゾフィーがレセプションでひどい仕打ちをされたと言うのに、同じように失礼なことをやり返してもかまわないと言う。

一日中振り回され混乱がよみがえった。四六時中わたしを批判すると怒鳴ると、車で待っていると答える。太ったと言ったのでもうすぐ解決すると答え、晩餐会の深紅のイブニングドレスでぽつんとたたずむ場面が浮かんで来た。二人ともうまくやれると言うとあなたたちに見せてあげると答える。

2

時 場所 何分か 赤い車下りる <カーヴインスキー・ギャラリー>

事件

ゾフィーはここだと言う。零落して言った地主の一族の屋敷だ。草むらの廃車に気づく。これは父が何年も乗っていた愛車だ。

時 場所 ウースターシャー 父の愛車

事件

おんぼろ車を級友や先生に見られるのはいやだった。家は小さく敷地は広がった。後の窓から中の行列を眺めた。ゾフィーが何してるの、それに恋しちゃったみたいと言う。わたしは車を蹴った。自責の念が起こる。後部座席の窓からのぞく。何時間も楽しい時間を過ごした後部座席だ。中に入る。一家そろって遠出したことを思い出す。

時 場所 イギリスの家庭で電話を引くようになる前の時代

事件

車で中古の自転車探しに出かけた。後部座席でうっとりした。真っ暗闇の中、壊れた車の後部座席に座っていた。身をよじって外に出た。

ゾフィーは長居しない、ボリスはおなかですいたと言う。わたしはさっきの口論を忘れてしまったように嬉しくなった。

時 場所 中庭 正面玄関

事件

リラックスしてきみらしくしていればいいと言うと、楽しみになって来たと答える。

19

時 場所 ドア 玄関ホール

事件

以前来たことがある。ホフマンが昨夜わたしを連れてきた屋敷だった。

時 場所 地方紙夕刊

事件

今朝丘の頂上サトラレ館で撮ったわたしの写真が載っている。

時 場所 ホールの中央

事件

二人を中に入ろうと誘う。

時 場所 戸口

事件

夜会服姿でグラスを手にした多勢の客でごった返していた。

時 場所 昨晚 大宴会場

事件

ここは小さい、顔見知りがないか探す。ゾフィーとボリスは不安そうに客達を眺めている。大半はゾフィーが無礼な扱いを受けたレセプションに来ていた連中だ。

時 場所 台の上 白く小さな胸像

事件

あるグループはオスカルの特産品の話をしている。わたしは、礼儀にかけている、招いた客を無視してオスカルに執心している。狭い世界の内輪のもめごとに気をとられていると話した。

ミス・コリンズがそのグループからわたしを引き離した。彼女が動物園に行ったことが町中の噂になっていることに驚いていると言う。レオが明日の夜成功するために行くことを承認したと言う。

時 場所 会場

事件

わたしは腕を組んでゆっくり会場を歩いた。ミス・コリンズは一人だけの生活に落ち着いてずいぶんになる。別れた後の生活に満足しいまのままで過ごすことに不満はないと言う。

わたしは愛していた男と一緒に過ごすのもいい、再婚を考えないか尋ねる。

再婚は考えた、レオが近くにいたから愛情を持てなかった。手を取り過去を取り戻すことを考えるには遅過ぎる。このままで物事を終わらせたいと言う。

私は本心を語っているとは思えないと告げようとしたが、ボリスがママが怒り出すと言ったのでゾフィーの方を見るとひとり立って誰とも話していなかった。

時 場所 昨晚の出来事 屋敷がホテルに似ている

事件

ミス・コリンズがレオが立ち直ってこの町で立派な地位を見つけることを何度も目を覚まして考えている、が二人にとって遅すぎると言う。

わたしはどのドアだったか考えてみた。早々に辞去することに気づかれることを恐れた。

時 場所 ドア

事件

順番に開けようとドアを手前に引いた。廊下につながっていた。

20

1

時 場所 二度目で正しいドア

事件

ホテルの談話室に続く廊下に立つ。ボリスは退屈なパーティだったと言う。

時 場所 引きずる物音

事件

グスタフがスーツケース三個を引きずっている。ゾフィーは立派に振舞えなかったという。

時 場所 理髪店とパン屋に挟まれたドアアパート

事件

ゾフィーが玄関の鍵を開ける。わたしは見つめているうち玄関ホールの記憶がよみがえる。

時 場所 テーブル ソファ 絨毯

事件

ゾフィーが料理を盛った大皿を持って入って来た。わたしは新聞を読み続けた。

時 場所 テーブル

事件

わたしは紙面から目を離さずときどき小皿に手を伸ばした。

時 場所 絨毯にゲーム盤

事件

ゾフィーはパパがボリスに古い手引書を買ってくれたと渡す。ボリスは何でも書いてあると喜ぶ。ゾフィーは混乱をもたらしたのだから代償を払わねばならない。料理も作っていなかった。デザートもなかった。

明日の朝予定があるからホテルに帰ると言う。ゾフィーはお腹は一杯と聞く。

2

時 場所 何分か

事件

ホテルへ帰る道を思い出そうと通りをさまよった。ゾフィーは予定を大混乱に陥れた。

時 場所 この町 二日目終わる

事件

町の危機について表面的な識見しか得られていない。伯爵夫人と市長との約束まですっぽかした。

時 場所 石橋 運河

事件

ミス・コリンズの招きに応じる道がある。ゾフィーに振り回されて失った情報を提供して貰えるかも知れない。明日朝一番に尋ねようと暗い通りへ足を進めた。

III

1

1

時 場所 部屋 前より狭い

事件

目が覚める。ホフマンに腹が立つ。

時 場所 カフェテリア

事件

朝食に行く。朝食抜きで大事な相談に向かう。むっとした。

時 場所 ロビー

事件

朝食が取れなくてがっかりしたと言うと、フロントマンは多勢がコンサートホールへ出向いているのでできないと答える。

2

時 場所 ホテルの外

事件

シュテファン車で夜行ったので道筋をよく知らない。グスタフが声をかける。コンサートホールへ行く、同じ方向だから一緒にと誘う。グスタフは、職業に対するこの町の姿勢を変えようとしてきた、講演で一言言ってほしいと頼む。わたしはほんの少し言及するという事で引き受ける。

時 場所 角

事件

ここで曲がると右手に入ってすぐのところと言い角に立って見送った。わたしはコンサートホールに歩き出した。

3

時 場所 住宅街 スペイン風バルコニー アパート

事件

シュテファンとミス・コリンズが話すのを眺めていたことを思い出す。

時 場所 ミス・コリンズのアパート

事件

客がいるなら別の機会にと言うと、一人だけが、しばらく待って、毎朝見えるみじめで孤独な人と言う。スピーチをするのにこの町の問題について助言を頂きたいと頼む。

ミス・コリンズは世界的に有名な人が何を恐れるのか、言う言葉は何でもありがたく拝聴すると励ます。

時 場所 応接間

事件

客はジョナサン・パークハーストだった。学生時代の顔見知りだ。緊張がほぐれた。何を言っても受け入れてくれる。こんなに出世した、ライダーの名は最後に出ると言う。

パークハーストは期末試験の後、どんちゃん騒ぎをしよう誘ったら、そんな暇はない、

試験で二月練習ができなかったと言われた。

時 場所 古い寮 小さな自室 学生時代

事件

協奏曲の楽譜を出していた。十九世紀の小説を読んでいた。小さな学生寮に戻りたい。

時 場所 窓を叩く音

事件

ブロツキーが仲をのぞきこむ。パークハーストは用件を聞いた方がいいという。

2 2

1

時 場所 玄関ホール

事件

言い争う声がした。パークハーストの後からブロツキーが入って来たブロツキーはスーツ、シャツにネクタイをし、花束を持っていた。パークハーストは彼女はあなたに会いたくないと言っていると言う。ブロツキーはいるなら呼んでくれと言う。

ブロツキーは、ライダーにやっと会えた。彼女と寝たいと言う。このアパートに来たのは初めてだ、六回やれば二人は何から何まで思い出せる、二人とも肉体は老いぼれたが、その行為を最後まで想像した、こんなに長年たっても彼女を思い出すと。ポーランドでは指揮者だった、音楽は慰めに過ぎない、いつきの助けになった。彼女は音楽のようなもので慰めになった。ブルーノが死んだ、頼みがある。

時 場所 ドアが開く

事件

ミス・コリンズとパークハーストが入って来る。花束を送ると受け取った。ここに来るなんてばかげていると言われ花束を贈るために寄ったと答える。単純な提案をするため話すことは何もない。

ミス・コリンズは今更遅すぎる、二十年たっている、最初から謝ろうとするのも聞きたくないと言う。服装を否定されるとこれがわしの服装だと反論する。

ミス・コリンズはワルシャワ時代のようにわたしの装いを変えられると思うのか？指揮者の妻そのことがとても大事だった。きのう動物園で会ったことは間違いだったと言う。ブロツキーは墓地で午後会ってくれ、話がしたいと頼む。

時 場所 一年前

事件

パークハーストは、立小便をした。卑猥な言葉を叫んだ、あれから一年たっていないと言う。

時 場所 四、五年前 バーンホフ広場近く

事件

パークハーストはブロツキーはミス・コリンズに襲いかかろうとしたと非難した。ブロツ

キーはパークハーストの襟首をつかんだのでパークハーストは後ずさりした。彼がブロツキーの指を振りほどくとブロツキーは黙って部屋から出て行った。

2

時 場所 玄関のドア

事件

ミス・コリンズはパークハーストにあんな口をきく権利はない、この一年信じられない勇気を見てきたのだからと言って、外に出て通りを歩いた。ブロツキーは速く歩き続けた。ミス・コリンズは追いかけた。

時 場所 横断歩道

事件

追いつけず、レオと叫んだ。驚いた表情で振り返ると花束を持っていた。

時 場所 真夏の日の午後 宝石店前

事件

二人がぼったり会い、ゲートまで歩いた場面を何度も思い描いた。

時 場所 外の通り

事件

ブロツキーはうつうつしている。やっと仲直りのきっかけができた。

時 場所 二十年

事件

ミス・コリンズはゲートを見る度心がひきつる。

時 場所 シュテンベルク公園

事件

彼女の中で重要な位置を占めるようになった。ブロツキーが二、三步後を恭しくついて行く。

時 場所 日曜の朝 プラーガ

事件

一緒にコーヒーを飲んだあの本屋へ出かけた。ミス・コリンズは今日の午後墓地へ行く。ブロツキーの今夜のことが心配だから。

パークハーストは二人に腹を立てる。わたしはいやなら本音をぶちまけろと言う。彼にのうのうとしてと言われ、今夜演奏する曲を練習していないことに気がつき、ピアノに触ってすらいないと反省する。二時間一人で練習できる環境を確保しなければならない。悪いがと失礼する。

時 場所 ミス・コリンズのアパート

事件

出てホテルに戻ってピアノに向かわなければならない。

時 場所 歩道

事件

プロツキーが立っていて、ブルーノに音楽を聴かせたい、やってくれと頼む。時間はさけないと断る。しつこい頼みに練習の後ならと答える。

2 3

1

時 場所 ホテル ロビー

事件

練習しようと談話室について尋ねると客がくつろいでいると断られる。

時 場所 ソファ

事件

ボリスは手引書を読みふける。ゾフィーはあとどのくらいこれを続けるのか、あの子は動揺してきたとつめよる。ボリスが心配しているのを見ていられない、声をかけてくれと言う。ボリスの脇に立つが本を読んでいた。

2

時 場所 ロビー中央 談話室

事件

二時間練習したいので開けてくれと頼むとホフマンは無理だからと練習室を進める。

時 場所 練習室

事件

ピアノの音は繊細で調律も完璧だった。

時 場所 左手の部屋

事件

男の咳払いがし、練習ができない。ホフマンは別館の練習室に案内する。

2 4

時 場所 談話室

事件

別々のグループなのに互いに盛んに行き来している。

時 場所 駐車場 大きな黒塗りの車

事件

ホフマンは、妻は才能豊かな者を出した家系の出で、美人と才能に恵まれていることを当然と考えていた、音楽が二人を結びつけたと語る。

時 場所 承諾後数日 運河のそばの部屋

事件

妻は部屋に入り、作曲はどこですのか尋ねた。作曲は二年間しないと嘘をついた。

時 場所 結婚 フリードリヒ広場 アパート

事件

アユバサダー・ホテルでいい地位についた。彼女が信じているような人間になりたかった。

時 場所 結婚一年目

事件

そこそこの幸せな生活になる。

時 場所 結婚二年目

事件

プレゼントに詩集を買って帰る。一言も言わずに受け取る。妻はわたしを見抜いていたと安堵した。つなぎとめたいならこれまでの二倍三倍の努力をしなければならなかった。

時 場所 数年間

事件

喜ばれるためにできる限りのことをした。自分をだまして愛をもらっている。

時 場所 ある夜 フィッシャー宅

事件

ピョトロフスキーは、クリスティはボードレールが好きと言ったと言う。わたしは全く知らないことだった。彼女にはわたしに隠している一面があった、自分をいかにだましていたかに気づいた。

時 場所 西側に墓地

事件

特別な夜はどのくらい前か尋ねると二十二年前と答える。ずっと連れ添って来たのかと言う。

唯一の希望はシュテファンで二人はそこに希望をかけた。今二十三才で、大器晩成と言いきかせた、わたしは才能に恵まれた青年と称える。

時 場所 待避車線 駐車 小さな木の小屋

事件

ホフマンは別館まで歩いて、南京錠がかかっている、ピアノは二〇年代に作らせたベヒシュタインのアップライトの逸品だ、二時間して迎えに来ると言って去る。

25

時 場所 小屋 ゲート アップライトピアノ

事件

南京錠を外して中に入る。何の装飾もない。ピアノを弾く音色は美しく低音部の響きが豊かで、最高の吸音と残響効果が得られるように選ばれている。

時 場所 《石綿と繊維》第一楽章 第二第三楽章

この作品を完璧に掌握していた。目をつむるとウースターシャ時代の隣人と両親のことを思い浮かべた。

時 場所 地面を掘る音

事件

ブロツキーが愛犬を埋葬している音に気付いた。彼は小一時間待っていた。

時 場所 何年も前の春の朝 二人がこの町に来て二週間

事件

二人は何ヶ月ぶりかで何とかやっけていけるかも知れないという気になった。

時 場所 翌朝

事件

二人分の朝食を用意した。二人とも喧嘩が終わったことにほっとして朝食を続けた。

時 場所 追想

事件

ブロツキーが追想にふけていた間に、わたしがやって来て練習を始めた。

時 場所 夕日

事件○

ブロツキーは穴を掘り遺骸を穴に入れ土をかぶせた。墓のそばに立ち、ありがとう美しい音楽だった。感謝すると言った。

時 場所 前の谷 一面に墓石 埋葬 三十人の遺族の一団

事件

ブロツキーは元の状態に戻るかも知れない、二度と許してくれないかも知れないと言う。悲観的にならなくてもいいと励ます。彼女に疑念が生じ去っていった。誤解は水に流す時だ、二人の余生をうまく生きようとしなければならないと励ます。

今夜名演奏を披露する。責め立てられあきらめ二人で逃げてこの町に来た。今夜どうなるか怖かったと嘆く。

時 場所 墓地の小道

事件

太った五十がらみの男が喪主の弟だ。あなたが式に参列してくれば姉が喜ぶと招かれる。ケーキをすすめられほおぼる。

未亡人がわたしに激しい嫌悪を抱いている。ここにいる人は懇懃に接しているが、わたしがいることに腹を立てている。

時 場所 サトラー館

事件

そこで写真を撮ったことを怒っている。これは見込み違いだった。複雑な問題があるかも知れない。

時 場所 離れる

事件

映画館であった老議員ペダーセンが、コンサートホールへ行く時間と知らせる。車を手配しておいたのでそこまで案内して貰う。サトラーは望む通りにやらせたら、違った町になっていた。見当違いの男で夢ばかり追う人間だったと説明する。

時 場所 高い鉄のゲート

事件

ペダーセンはプロツキーがどんな演奏をするか、失地回復するしかないと言う。車が待っているコンサートホールへ連れて行ってくれると答える。

26

1

時 場所 階段 待避車線

事件

ホフマンの車が待っていた。映画館で初めてペダーソンと会った。

時 場所 夕日

事件

サトラー館の件で慎重に対応しなかった。市民相互支援グループの会合に出ればよかった。ピアノの練習は必要なかった。早くコンサートホールへ行きたいと頼む。

時 場所 田園風景

事件

両親の問題があると言うと、有名な馬車で迎え特別席に案内すると答える。

時 場所 公式行事

事件

ピアノ・リサイタルをシュテファンがやる。歓迎挨拶、楽団員着席、プロツキー指揮、短い休憩、紹介、ライダー指揮。

時 場所 電光掲示板

事件

質問の一つ一つが表示され、壇上から答える。

時 場所 市街地の道路渋滞

事件

プロツキーについて、仲直りができそうと言うと、どういうつもりだと答える。用があるが渋滞で時間がかかるので徒歩で行ってほしいと降ろす。

2

時 場所 狭い通り 観光ホテル

事件

相次ぎ応答がスムーズに運ばないこともある。両親のことも心配だ。まわりの建物でコンサートホールが見えなくなる。

時 場所 角

事件

曲がったとき、コンサートホールが現れた。わくわく通りを歩く。

時 場所 曲がり角

事件

煉瓦の壁が道路をふさぐ、中年の女性に尋ねると、この壁は有名な観光名所と説明する。もと来た道に戻る。狭い小さな路地で迷う。

時 場所 カフェ 広場の外れ

事件

コーヒーを注文する。サトラー館での写真撮影でわたしの権威を傷つけた。埋め合わせをしなければならない。グスタフがみんなあそこにいる、一緒になろうと誘う。グスタフは仲間はどう同意してくれたか何度も話してくれと言う。何か心配事があるように見受けられたと言う。ハンガリアン・カフェに向かう。

27

時 場所 ハンガリアン・カフェ 暖炉 円卓

事件

グスタフは十二人の初老の男たちにライダーがあいさつに来たと紹介する。我々を救って本当にやってくれと歓迎する。わたしは驚いた。

時 場所 大きな茶色いダンボール箱

事件

ポーターはテーブルの上に上がりダンスを踊り箱を放り投げるゲームをする。ボリスは誇らしげな表情で祖父を見守る。グスタフはスーツケースを持ち上げ一方の肩で箱を支えてダンスを続ける。箱を放り投げスーツケースを肩の上にあげた。次にスーツケースを肩に乗せゴルフバッグに腕を伸ばした。ボリスはやめてと叫ぶ。ゴルフバッグを提げもう一方の肩にスーツケースを担ぐ。直立し勝ち誇った表情をして体を回した。ボリスはもういいやめと叫ぶ。グスタフは回り続けた。彼は床に下りた。カフェ全体歌声に包まれた。

ボリスはグスタフのそばに行き、二人は目を閉じ抱き合った。グスタフは私に何か起きたら後を継ぎ両親の面倒を見ると言った。ボリスはうなずいた。

時 場所 ハンガリー語

事件

ハンガリー語が分からないので皆それらしく歌詞をでっち上げて歌う。

時 場所 二十分後

事件

店主は疲れている様子だ、ソファでやひろめ休めと毛布をかけてくれた。

28

時 場所 ソファ

事件

目が覚めた。朝かと思いカーテンを開けて、休めと言われたことを後悔した。

時 場所 カフェの店内 表の出口 人気のない広場

事件

いろいろなことにかかずにわって最優先の問題をおろそかにした。

時 場所 広場

事件

さまよい出た。コンサートホールを探して歩き出す。

時 場所 一人の女性

事件

尋ねるところから出てきたと言う。クリスティーネ・ホフマンだった。あと一時間は誰も着かないと言う。

時 場所 運河沿いの道 狭い脇道

事件

コンサートホールのドーム型の屋根が見えた。クリスティは息子が幼かった頃、安らかに過ごした、やがて二人のすべてが別の方向に行ってしまった。敗北してきたと語る。何だと思いか尋ねると、クリストフを実力のある人と入れ替える

時 場所 通りの真ん中

事件

気落ちしない方がいいと言うと、あきらめていない、強い絆の家族を持ちたい、長い年月の問題が正しい瞬間があれば変わると信じていると答える。

シュテファンの演奏に感心した、その瞬間に出会うかも知れないと言うと、可能性については考えたが少し恐いと答える。

29

時 場所 ドア

事件

クリスティーネが夜の中に姿を消すとドアへ急いだ。

時 場所 ここ数月

事件

つまずき、混乱したが、重要な目的を果たせるかぎり何ら影響がなかったことになる。

時 場所 ドア

事件

開けて中に入った。ここが楽屋と教えたが台所に迷い込んだ。コンサートホールとピアノを下見することが関心事だ。

時 場所 廊下

事件

歩いているとポーターに会った。カフェのあごひげのポーターは、グスタフが倒れた、一刻も早く病院へ運びたいがライダーと話してからと言うので探しに来たと言う。

時 場所 楽屋

事件

空いている一つに運んだ。わたしは中に入り、グスタフと二人きりになった。気分はどうか聞き、病院に行けばタイミングを逃す、全員が長年我慢してきた、扱いの不当を訴えることを誓約すると言うと、別の事と言う。ゾフィーとの了解とのことだ、二人の了解のことを説明しやってほしい、娘をここに連れてきてほしいと頼む。

時 場 ドア

事件

見守ってくれと頼んで廊下を急いだ。ホフマンを探しゾフィーのアパートまで車で送って貰おう。ホフマンは夜会販に厚化粧をし、鏡に見入っていた。迅速にあると所へ連れて行ってくれる車が必要と頼むと、スタッフ全員が手一杯自分も監督する。ブロツキー宅を出た時、彼は少量のウィスキーを飲んだ。少し飲むのは落ち着くためだ。

時 場所 数カ月

事件

ブロツキーは自分を取り戻した。ミス・コリンズがみじめな人生に逆戻りすることを見過ごせない。

時 場所 応接間

事件

ブロツキーと会うと言うとミス・コリンズは目を輝かせた。

時 場所 墓地

事件

ブロツキーは墓石の上にごっかりして座っている。来ないのは分かっていたと言う。ホフマンは彼女はここに来ない、コンサートにも行かないと言った。

時 場所 ブロツキーの家

事件

ブロツキーは少しだけ飲みたいと言った。ちびちび飲み始め帰って来た。私はウィスキーを飲んでいるブロツキーを残してきた事に満足ならホフマンの問題だ、わたしには助けがたい事と言うと、ホフマンは車を貸す、朝までいいと鍵を渡す。

30

時 場所 駐車場

事件

運転し、森を通り抜けた。

時 場所 コンサートホールの正面玄関

事件

両親が到着したかも知れない。別の要件で離れようとしている。

時 場所 前方

事件

手を振る二人がおり、五六人が携帯用コンロでキャンプしている。女性が、議論が行き詰

まり合意が得れない。男が、結論を出さねばならないと言う。旧友ジェフリー・ソーンダースがコーヒーをすすめる。都合が悪いと断ると、お前の事を考えていたと言う。

時 場所 中等学校六年生

事件

下級生のためのクロスカントリーの監督役の話をし、しぶしぶ車から降りた。

時 場所 ポーツマス

事件

ソーンダースは家族旅行の話をした。

時 場所 自転車の残骸

事件

ブロツキーが仰向けに横たわっていて、やあライダーと声をかける。男はひどく酔っていた、足は切断しなければならないと言う。外科医が車に何かないかと聞く。知り合いから借りた車だと言ってトランクを捜す。隅に弓ノコがあり使う。ブリッキーは自転車に乗っていて車にぶつかった、酔っ払っていた。コンサートホールに行くと言う。わたしが、十分な応急態勢が取れないのかと言うと、ジェフリー・ソーンダースがコンサートホールで大行事があるから救急車が足りないと答えた。

時 場所 公衆電話 電話ボックス

事件

ゾフィーに、下見の一秒の暇もない、あれこれ要件を持ってくると言う、ゾフィーはライダーに食ってかかった人はいない、冷静に自己満足していると答えた。グスタフが病気で倒れた、ボリスと一緒に来てくれ、車を借りた、迎えに行くと言うと、きのうの夜の事を謝りみじめだったと言う。支度しておいてくれと言うと、すぐ来てくれるかと言う。

時 場所 電話ボックス

事件

医師がノコギリを引いた。ブロツキーが悲鳴を上げた。エンジンをかけると、ジェフリー・ソーンダースが車がいると怒る。心配しなきゃならない問題があると言うと、まったくライダーらしいいつものことだと言う。君とは生活が違うと怒鳴ると、外科医でさえ作業の手を止め、ブロツキーも痛みを忘れて見つめた。すばやく窓を閉め森の中を走り始めた。

3 1

時 場所 森の中 夜明け 市街地 ゾフィーのアパート 理髪店の上

事件

ゾフィーは遅かったと、ボリスは間に合うように着けるから大丈夫と言う。落ち着き払い母をなだめる。二人後部座席に座る。ゾフィーは、パパは年を取っている、ホテルで働いてきた人達が違った職種に変わると言う。

時 場所 コンサートホール裏

事件

車を止めるとボリスは母に手を貸した。

時 場所 廊下

事件

楽団員の数が増え、演奏会用の服に着替えていた。プロツキーはまだ来ていない。

時 場所 奥の楽屋

事件

ポーター達が集まっている。男がかれはまだ持ちこたえていると言う。ゾフィーは、届け物を持って来たと言う。動かない。ボリスが、ママはここにいてと言って中に入って行った。ゾフィーはほっとした。

時 場所 数分

事件

ボリスはとても嬉しいと言っていると言う。ゾフィーはプレゼントがあると言えと言う。ボリスは楽屋に戻る。

わたしは確認しておかなければならないことがあると言ひ、ホフマンを探そうと去った。ゾフィーは包みに気をとられていて返事もしない。

3 2

1

時 場所 廊下 騒動

事件

十人余りの人がもめている。奇妙な人達の集団だ。プロツキーはアイロン台を松葉杖にして歩いている。外科医が、体は大きなショックを受けていると注意する。短い時間でよく松葉杖を使うようになったと言う。連れてきた男がベンチにこれを積んでいたので使った。時々開きそうになると言う

ミス・コリンズがここに来るように説得できないか問うと、来てくれるかと言うとうなずいたので信用できると答える。本当にステージに出て大丈夫か問うと大丈夫と答える。

2

時 場所 廊下の先

事件

ホフマンはどこにいるかと反対方向に歩き続けた。廊下の先にホフマンがいた。うなだれてゆっくり歩いていた。スピーチの練習をしている。

ホフマンはプロツキーはもうすぐ来ると言う。到着したと伝えた。両親がどうしているか、着いているか聞くと、知らない、ミス・シュトラットマンは知っている、気配りするように言っておいたと答える。彼女はどこにいと二人で廊下を歩きだした。

シュテファンが困った様子で立っていた。彼は母さんはまだロビーにいる、あと十五分で出番なのにと訴える。ホフマンは楽屋に戻って準備しろと言う。ライダーに励ましはかけがえのないものだったと礼を言う。かなり才能を持っている。演奏はセンセーションを巻き起

こすと言うとホフマンは期待にこたえてくれるかも知れないと喜ぶ。こんな彼を残して廊下を進んだ。

時 場所 ブロツキーの楽屋

事件

ホフマンはクリスティの様子を見に行くからブロツキーの準備ができているか確認してくれと戻って行った。ブロツキーはタキシードを着ている。落ち着いた口調で威厳がある。脚の具合を聞き、指揮ができるか尋ねる。彼は傷など大したことない。足をなくしたのは何年も前で自転車に挟まれたが義足だ。気がつかないのは外科医だ。鉄道の事故で失った、ウクライナのどこかで。あいつが切ったのは木の義足だ。ハサミでズボンを上品に切る。彼女はわたしを見る、立派なオーケストラを見せてやると言う。外科医はこそこそ逃げ出す。ブロツキーはアイロン台をつかみ脇の下にはさんだ。行かなければと出て行く。

33

時 場所 グスタフのいる部屋

事件

ポーター達は集まってひそひそ話をしている。一人が、持ちこたえている、医者を呼びに行ったと言う。彼女は一度も中へ入らなかったかと聞くとまだと、ボリスは何度か入っていると答える。

ゾフィーにそのコートを渡さないのかと言うと、今そうしようとしていると中をのぞきボリスを大声で呼んだ。

ボリスは済まなかったと言っていると言う、ゾフィーはそれだけかと言い、これを持って行ってとコートを渡す。ボリスは受け取り中へ入る。必死で耳をそばだてる。

ボリスはありがとうと言ったと言う。いい大きさとか色がいいとか言われなかったかと肩をつかみ乱暴にゆする。グスタフと同じ、独善的で自己満足とポーター全員に向かって言う。

ボリスは診察カバンを拾い、身を守るように胸の前にかざした。隣の部屋にかけこみドアを閉めた。

時 場所 隣の部屋

事件

気でも狂ったのか、あんなに取り乱してと言った。ゾフィーは中に入って謝った。中に入ってやさしくしてやると言う。何のことを言っているのか分からない。

時 場所 隣の部屋 机 椅子 黒板

事件

ボリスは本を机の上に置き、気に入ったと言う。わたしは歩き続けた。手引書を読んでいる、返事はすまい。ボリスはママは時々、とても不機嫌になると言うが、話しかけている気配がないので返事をしない。手の平で机をたたいた。こんなものを読み続けるとひったくろうとするが、両腕で押さえつける。奪おうとすると机の上につつぶして全身で守ろうとする。

本を隅に放り投げると拾いに行った。

時 場所 廊下

事件

ゾフィーは直すところがないか、ボタンが取れかかっているか聞いて来いと言う。みんなにとってつらい時だと肩に腕を回したが、ふりほどき戸口を見た。

ボリスはコートは嬉しかった、気に入ったと答える。ゾフィーはいら立ちのうめき声で直してほしいところ、下のボタンのことを聞いて来いと言う。ボリスは重圧にさらされているのに、ボタンを心配し重圧を分かっていない。ボリスは熊の絵がついていたと言った。直さなくていいのかと叫ぶ。

ボリスがみなさんに入ってほしい、全員来てほしいと言っていると伝える。ゾフィーは突然部屋に入った。グスタフが水泳用品を買って来てくれたと言うと、お前を誇りに思っていたと言う。若い医師が診察した。

演奏の前にやらなければならないことがある、医者が来た今こっそり抜け出せる。ゾフィーはどこへ行くのと怒る。わたしを頼りにしている人がいると腕を振りほどこうとする。ボリスはいてほしい、二人ともいてほしい。

明らかに分かっていないと腕をふりほどきできるだけ早く帰ってくると出て行く。

34

1

時 場所 廊下

事件

急ぎ足で歩く。

時 場所 小室

事件

何人もの手に押され短い階段を上がらされた。

時 場所 細長いドア

事件

高いところからコンサートホールを見下ろす。

時 場所 客席 三分の二埋まる

事件

客がしゃべったり挨拶したりしている。

時 場所 舞台 オークストラ席 譜面台 一台のグランドピアノ

事件

弾くこの楽屋を見下ろし、これが会場の下見になる。

時 場所 ホール

事件

シュテファンがピアノに近づく。ホフマン夫婦が姿を消す。シュテファンは演奏をやめロ

ビーに向かった。どうして席を立ったと聞くと、ホフマンはクリスティはあの時点で帰った方がいいと思った。私も賛成した。彼女は洗面所へ行っている。シュテファンはピアノに戻ってピアノを弾くと言う。ホフマンは夢を持ってもらいたかったと言う。生まれつき才能がないなら自分で認めなければならない。数分でいいから聞いてくれ、愛しているから見るに忍びない。シュテファンは聞き入れて貰えないと分かると向きを変えて廊下を歩き出した。

2

時 場所 廊下

事件

シュテファンは両親を説得できなかったことにいらだった。どれだけやれるか試してやろうと思った。

時 場所 ステージ ピアノ《ガラスの情熱》

事件

シュテファンは精緻なタッチで鍵盤をたたき冒頭を弾き出す。場内は完全に沈黙しシュテファンを凝視する。全員が驚嘆し驚く。演奏を終えた。熱狂的な拍手が沸き起こった。彼は急いでステージから姿を消した。

時 場所 詩の朗読

事件

はげ頭の男が詩の朗読をする。わたしはホールを見下ろし、ミス・コリンズを見つけた。様子は完ぺきに冷静で落ち着きはらっている。

時 場所 数分

事件

ステージには誰も現れず、聴衆はおしゃべりを始めた。ホフマンが登場し、指揮をするのはブロツキーだと紹介し大きな拍手の中袖に引っ込んだ。

時 場所 シュツツガルト・メーゲル財団管弦楽団

事件

楽団員達が出て来た。オーケストラが落ち着くとブロツキーはごんごんと音を立てて現れた。アイロン台の何かが外れもろともに倒れもがいた。ミス・コリンズは指をあごに持っていった。ブロツキーはアイロン台をたたんで立ち上がり片足で立った。

時 場所 マレリー《垂直性》冒頭

事件

指揮は激しさを増し、音が爆発した。わずかな支えでバランスを維持する。楽団員達は少しずつブロツキーの楽想に引き込まれていった。オーケストラは彼の手兵になり、聴衆も魅入られたように座った。わたしも次第に魅了されていった。

両親を探そうと身を乗り出した。見回したが見つからない。ホフマンがミス・シュトラットマンを探している。高い場所から出て行こうとした。

3

時 場所 再び小さな階段の最上段 二十八人が順番を待っている。

事件

階段をおり廊下を急いで会談の吹き抜けを見下ろす。

時 場所 舞台裏

事件

オーケストラの演奏が聞こえた。

時 場所 ステージの袖

事件

立っていた。プロツキーとオーケストラを眺める。聴衆は見えない。指揮者と楽団員が反目し合っている。プロツキーはやりすぎた。楽団員は疑念、苦悩、嫌悪に陥り、聴衆は不安になる。プロツキーはいつそう進めたがっている。激しい痛みを襲われている。聴衆に好感は消えた。

時 場所 数分間

事件

やめるように告げるべきか考えていた。正しく判断しているならこの哀愁を救える。

時 場所 別のこと

事件

プロツキーは指揮棒を大きく振り、バランスを失いひっくり返る。ステージへ飛び出した。楽団員は悲鳴を上げた。脚がない、どうして気絶しないでいられたのか？

プロツキーは、彼女はどこだ、どうしてわたしを抱いていないと言う。ミス・コリンズは冷静上品に立っていた。ここにいるのはレオと声をかける。よかったら手を握ってもいいと言う。カーテンの方へ戻った。人生を無駄に過ごされた、自分の傷ばかり気にかけている、正統派の指揮者になれない、臆病で無責任なペテン師だと言う。

時 場所 カーテンの隙間

事件

わたしに助けを呼んでこなければならぬ、あなたの言葉はすばらしいと言う。プロツキーは言葉は本当かも知れないと言った。

時 場所 カーテンの隙間

事件

彼女を呼び戻しに行ってみる。わたし急いで出て行った。

3 5

時 場所 会場 照明明るい 聴衆一人もいない

事件

ミス・コリンズを追いかけた。彼女は鋭い視線でにらみつけ、その後姿はなかった。やっこさんは一日としてしらふでいたことはなかった。不道德すれすれだ、マックス・サトラー

が正しいと考えていると話している。ひどく間違っていると言ったが相手にされなかった。

時 場所 ホールの正面

事件

上へ上ってグスタフの具合を確かめねばならない。

時 場所 廊下

事件

ホフマンは大失敗と言った。わたしの出番はこれからだ。收拾をつける。彼の追悼をして捧げると言う。

時 場所 二冊のアルバム

事件

クリスティフのアルバムを見てくれと言ったのに約束を守らなかった、彼女を侮辱したと非難する。申し訳ない、スケジュールはとても混乱していたと詫げる。ホフマンがアルバムを持ち上げると、夫人は返してと怒り狂う。アルバムを眺めひどく罰の悪い思いにかられる。ホフマンは今夜は大失敗だ、シュテファンは笑いものだ、プロツキーの復活に失敗した。わたしが名士でいるのは不可能だと言う。夫人は手を差し出しひっ込め消えた。

わたしはどうすればよいか分からず見つめていた。両親はどうなっているという、ミス・シュトラットマンが世話役だと言う。

36

時 場所 モダンなオフィス 早朝

事件

ミス・シュトラットマンは電話をしている。電話を切って聞いてくれと言う。わたしの訪問にさいしてスケジュールや約束について知らせてやると言ったが期待外れだった、両親はどこにいると言う。

彼女はライダーから聞いたただけだ、電話して所在を突き止められなかった。確信していたと椅子に崩れこみすすり泣く。彼女は何年か前に来て、もてなしを受けた。

時 場所 ドア ノック

事件

彼女はやさしくほほえみかける。そちらへ行って演奏しなければならない、感謝していると言って廊下へ出た。

37

時 場所 朝の光 廊下

事件

一刻も早く練習しなければ、普段の水準で演奏するのは義務だと思う。

時 場所 「ステージ」表示 ステージ袖 ピアノ

事件

入り、カーテンの隙間に近づいて布を引いた。

時 場所 光景 一人もいない 座席もない 暗い空っぽの空間

事件

何人かが片付けを終えようとしている。オフィスに一時間いて、聴衆はわたしの登場をあきらめた。

時 場所 ホール

事件

シュテファンは意気消沈している。励ましに感謝している。両親は正しいと言う。大きな町へ行って師事しなければいけないと言う。才能ある青年で未来があると励ます。

時 場所 出入口

事件

シュテファンはここから温室へ入る、朝食を取りに来ると言う。プロツキーは聖ニコラス施療院へ運ばれた。彼の演奏は最高の演奏だったと言う。

温室にいる人にスピーチすると言うと、ライダーの言葉に聞く耳を持たない、無駄だと止め、グループの会話に加わる。

時 場所 温室 広大 朝日

事件

リサイクルに戻ってくれと頼むなど言うに及ばない。ウェイターは寄りつかない。この町で求めに対処する能力を心配してきたことが無意味だった。町がよそ者に指図されず平穏を取り戻す。ウェイターにおあずけをくらう。

時 場所 ポーター

事件

一人が三十分前にグスタフは息を引き取ったと言う。知り合って数日、親切にしてもらった。ライダーを捜したのはグスタフがスピーチをしたか知りたかったからだ。

スピーチだけでなくたくさんのことが計画通りに進まなかった。グスタフを思い出し、基準をゆるめず根気よく続ける。町の大きな問題について知ろうとしないのは驚きだ、わたしの生活は分かっている。ゾフィーとボリスは小道を決然とした足取りで歩いている。

38

時 場所 小道 高い鉄の門

事件

二人は先に行く。門を通り抜けた。わたしは早足で歩く。

時 場所 電車発車寸前

事件

やっと乗った。二人は前の方にいる。電気技師が話し出した。二人とも八十代だ。私は何年か前両親がこの町に来た、知っているかと聞くと見覚えがあると答える。

時 場所 前方

事件

二人のところへ行く。二人は悲嘆にくれ抱き合っている。すまなかったと言うとあたしたちの愛情の外にいた、悲しみの外にいたとうんざりする。ボリスは一緒にいなくちゃいやだと言う。ゾフィーは、彼の一員にはなれない、本当のお父さんのようにボリスを愛してはくれないと言う。二人は降りた。

時 場所 電車動く さっきの席

事件

すすり泣く。電気技師が、いつも最悪に思えるのはそれが起きているとき、過ぎ去ってみれば思っていたほど悪くない、元気を出せと励ます。何か食べとすすめる。

時 場所 後部

事件

食べ物をとってきて食べる。

時 場所 自分の席

事件

停留所を教えてくれるかも知れない。ヘルシンキ行きが楽しくなっている。席へ戻ろうと歩き出した。

2 舞台

一九八五年頃、イギリスに展開する。ライダーがある町を訪れた五、六日間の出来事が描かれる。

3 人物

(1) ライダーとグスタフ、ゾフィー、ボリス

ライダーは世界的なピアニストだ。演奏に招かれてこの町に来た。ホテルに着くが支配人ホフマンは会議に出ていない。誰も迎えず、タクシーの運転手は戸惑う。自らスーツケースをエレベーターまで運ぶ。

有名で、招待されて来たのにライダーは初めから拍子抜けだ。歓迎され拒否される待遇から始まる。

プロツキーの練習のピアノの音を聞く。ピアノ演奏のためやってきたのに、着くとピアノを聞かされる。何から何まで立場はどうなっているのかと思う。

ポーターグスタフはスーツケースを運び、ポーターの誇りを語る。グスタフには悩みがあり解決できないでいる。ライダーは外部の人で有名人だ。相談しやすい。

娘が幼い頃は親密だった。棚を作ろうとするグスタフにつきまとい手伝おうとしたが一言も口をきかなかった。帰ると彼女は迎えずそっぽを向いた。お互いに口をきかないことが決まりになった。

ゾフィーのハムスターがいなくなった時、彼女は叫び泣きじゃくった。その時、グスタフはラジオコンサートの中継を聞いていて叫びが聞こえなかったふりをした。ゾフィーは聞こえていたことを知っていた。二人の了解ができあがりお互いに口をきかなくなる。

二人はいつも口をきかない。グスタフはゾフィーとボリスの関係を心配する。自分から声

をかけられないので話してみしてほしいと頼む。わたしはそれは家庭の問題と関係しており、部外者には分からない。全体が複雑にからみあった家族の問題はグスタフの方が役目にふさわしいと断る。

グスタフは、さらに娘が現実になんが問題かに気づく手伝いをしてほしいと断る。

わたしはいいだろう、やってみると引き受ける。家族の問題に関わることのできる者はいない、自ら解決するしかない、ライダーは分かっているがグスタフのためと思ひ引き受ける。家族の問題を家族で解決できない時、他者に頼る。身内や町の人に頼めない。外から来た人がいい、有名人がいい。そういう人は分からないから何かできそうと頼みやすい。

グスタフは娘に声をかけられなくてライダーに頼む。ゾフィーとボリスのことを心配して声をかけたいができない。ゾフィーはグスタフに声をかけられない。ゾフィーは身近にいるボリスに代弁させる。が、意図は伝えられない。二人の了解は了解することで二人を離反させた。ゾフィーが子役の頃から四十才になった今まで何十年にもわたって築かれ続けてきた了解だ。ここに他者は全く介入できない。

グスタフは、ポーター仲間との催しもので無理をする。仲間が見て、ライダーが見る。孫のボリスも喝采する。はりきり過ぎ脳梗塞を起こす。それでもグスタフは二人の了解を終わらせる気はない。

グスタフはポーターの地位向上のスピーチをライダーに頼む。この結果を知るまでは病院に行けないと言う。彼はゾフィーに声をかけ自分と話すようになるようにと頼む。これらの結果について知らなければ病院に行けない。ライダーはどちらもできていない。

グスタフの体を心配する気持ちをゾフィーは抱くことができず、当然表現することもできない。グスタフが横たわる部屋の外にいる。心配する気持ちを表現できず、コートプレゼントすることで表そうとする。その大きさ、色、ボタンに反応することを通して心配の気持ちを表し、反応を受け止めようとする。ボリスは何も分からないから、グスタフの言葉をそのまま伝えゾフィーは怒り出す。直接会って言えば気持ちは通じあうのにそれはできないことでこうするしかない。気持ちを物で表そうとし、それに対する反応で判断しようとする。ゾフィーは、現実になんが問題かに気づくことができない人だ。

グスタフは、話になれたか尋ねるが、ライダーは部外者には難しい、じかに話していないと答える。

ようやく会うことになった二人に会話は、水泳帽を持って来てくれた思い出と、誇りに思う態度を語ることだけだ。最後の最後まで二人の了解は存在したままだ。

この二人とともに育ったボリスはそれこそ二人のような子供だ。自分勝手に、一人したいことをする。祖父としてグスタフと母としてゾフィーと関わる。

ゾフィーは四十才位、長身で長い黒髪の魅力的な女性だ。夫は大声を出し何日も家を空けるので離婚し一人でボリスを育てる。祖父とは、父とは思っても交流しない

アパートへライダーを連れて行くのに、一人で勝手に先に立って歩き二人は離れてしまう。迷惑をかけても、かけたことが分からず申し訳なさそうな素振りも見せない。冷静な口

調で話す。

ごちそうを出すと言っても、出来合いのものを組合わせて出すだけだ。夫の空白をライダーで埋めようとする。ライダーが事情があって何度か出て行くが、理由も事情も理解できず、ただ怒る。

ボリスにかこつけて、希望や主張を通そうとする。ボリスを心配している、ボリスが望んでいると言っても、することをライダーに指示するだけで、自分でしてやることは何もない。グスタフの死後、二人でどこかに行く。

ゾフィーは夫と別れ、ライダーと別れる。自分を通すだけで、人のすることを考えることが理解できず、人はゾフィーから離れていく。

ボリスは父の空白をグスタフとライダーで埋める。グスタフは可愛がってくれ、素晴らしい芸ができる怪力の人だ。祖父の死で再び空白が生じる。ライダーは相手になってくれ気心が通じ暮らしたがった。必死に一緒にいたいと言ったが、引き離された。ボリスは、母を支えるようになる。成長し、自覚がそなわった。ゾフィーはそのまま変わらなくても二人の生活はボリスの成長で好転していく。

(2) ライダーとホフマン・クリスティーネ・シュテファン

ホフマンはホテルの支配人、五十がらみ、背は高く太っている。クリスティーネと結婚した。彼女は代々才能豊かな者を出した家系の出、母はすぐれた画家、祖父はフランス語の大詩人だ。才能に恵まれていることを当然と考えていた。美人だった。音楽が二人を結びつけた。ホフマンはクリスティーネに憧れていた。ホテル・グルゲンホラに勤めていた。彼女は部屋に入り、作曲はどこでするのか尋ねた。ピアノはなかった。作曲は二年間しないと嘘をついた。クリスティーネはうなずき、二度と作曲のことを口にしなかった。アンバサダー・ホテルでいい地位についた。誤解のことを忘れていなかった。

プレゼントは一言もいわずに受け取った。考えていたことを確認するような目つきをした。わたしを見抜いていたと安堵した。貧しくピアノも買えないことを認め、見過ごした。嘘を暗黙のうちに了解して対峙した。

ホフマンは、つなぎとめたいならこれまでの二倍三倍の努力をしなければならないと努力した。付度して振る舞い、相手はそれを黙認している。作曲家に興味を失う自分をだまして愛をかちえた。彼女は誇りを持ち、ホフマンを内心で見下げ、上に立って振る舞った。

意見が合わないとホフマンは曲げて言いなりになった。意見を述べる際まずクリスティーネの判断を考え、それに合わせた。あとからも自分が違うことを言ったりしそうになると、すり変えた。妻に気をつかい言う通りに振る舞った。二十二年間ずっとそうした。ホフマンは結婚生活を維持するため、妻に従い合わせ、妻をたたえて来た。

クリスティーネはポードレールが好きだった。ホフマンは全く知らないことだった。ホフマンに秘密を持ったまま平然と接してきた。隠すことで誤解の仕返しをしていた。彼女はそれまでの上流婦人としての自覚を仮空の形で持ち続けた。

クリスティーネがライダーに関わる記事を集め、二冊のアルバムにした。ホフマンはこれ

は妻にとって重要なものと価値あるものと認め、ライダーに見てくれと頼む。渡す機会を検討し今か今かと待っていたがその時は訪れなかった。ホフマンは妻を侮辱したと怒る。

クリスティーネはそれほど重要なものと思わない。単なる収集だ。ホフマン一人が価値を認めた。調べもれなく収集した記録はそういう価値を持つ。妻は望むことをして満足した、人に見せる価値はない。自己満足だ。

二人の唯一の希望はシュテファンだった。そこに希望をつないだ。今二十三才で大器晩成と言いきかせた。クリスティーネはシュテファンを見るたび、結婚は間違いだったと思う。彼は夫に似て才能がない。

ドイツ留学中の大学時代、シュテファンは母の誕生日に帰って来た。ホフマンは、彼女は機嫌が悪いと言う。シュテファンは自分の言動が機嫌を損ねたか心配する。二人は交替でおもしろい話をする。

シュテファンがピアノ演奏を披露することになる。両親は息子に期待し、裏切られピアノの演奏をめぐる辛い思いをしてきた。シュテファンはこの晩が台無しになると思う。終わって両親は彼を見ていなかった。クリスティーネは二階に上がった。シュテファンは徹夜で車を走らせ帰った。いわば父が妻の機嫌を直させるという難行を邪魔することになる。父は深く慈しみの表情をしていた。

名門出のクリスティーネはホフマンを軽蔑する。夫婦関係では自分が上で思い通りになる。ホフマンのピアノに期待したがピアノさえない貧乏人だった。シュテファンが生まれると、期待し四才から有名な夫人に習わせた。彼は二年程中断する。シュテファンにも失望する。演奏もろくに聞かない。期待したシュテファンに失望する。家での演奏は聞いてもコンサートホールの発表はロビーにいて聞かない。下手な演奏ははずかしく聞いていられない。

クリスティーネは上流階級で育ち上流婦人になった。上流夫人として一流の人を家族に求め失敗した。ホフマンはシュテファンに息子を見る。力がないと思いつつ期待し、コンサートホールの発表をすすめ励ます。

シュテファンはライダーに演奏を聞いて評価してもらおうとする。彼は母の好む曲にするか父のすすめる曲にするか迷う。ライダーは、人生には自分の決定を貫かねばならない時はあると言われ、母の好む難しい方の曲を選ぶ。ライダーにしつこく迫り、強引に連れ出し、談話室で弾く。外で聞いていたライダーは音楽に引き込まれ独自のきらめきがあると感動する。

コンサートホールで演奏し会員が驚嘆し驚いた。ライダーに認められ会場で評価される。両親は才能を認められなかったが、才能はあり絶賛された。両親は才能を見抜けなかった。ライダーは見抜いて告げたが受け入れなかった。自分達の力量で判断した。四才で有名な指導者の指導を受け、二年程中断したが再開した。この間彼にとっては休憩くらいの意味だ。ピアノの魅力にとりつかれている。中断を通じて上達していく。大学に留学し力をつけた。町の人の評価に自信を持ち大きな町に出て行く。町にいて町に町の人にとらわれていた自分に気づく。脱皮して力を発揮しよとする。自信を誇りをもち、その力をのぼそうとする。ホ

フマンと夫人は夫婦関係に当初から問題があった。誤解でそれを処理してきた。つまり、思いやり終始生活を続けた。期待した息子に失望したが、息子は二人の誤解を超え自分を信じ励み続けた。父と母のいさかいに気をつかいつつ、父と母を思い愛し続けた。シュテファンはこうして自分を開花させた。父と母に不満を抱えず反発せず、できる範囲で息子であり続ける。

(3) ライダーとブロツキー・ミス・コリンズ

ブロツキーは七十六才、長身、無骨で気さくだ。ウイライナで鉄道事故にあって左脚を失い、木の義足をしている。ミス・コリンズは年配で銀髪だ。ブロツキーは指揮者としてワルシャワで活躍していた。二人はワルシャワで結婚生活を送った。そこで大失敗をし、逃げてこの町にやって来た。ブロツキーは酒に酔い千鳥足で歩いている。犬を連れて図書館に入る。ミス・コリンズは愛想をつかして別れる。二人は別居しているが互いに愛し合っている。まわりの人は二人をなんとか復縁させようと骨を折る。

動物園で二人を合わせ。話をするように仕向ける。ブロツキーは有能な指揮者として町に来て歓迎される。有名人を頼りにする町の人々の体質がある。特別な人に注目をしてすぎる。その人を特別扱いし、信頼する。何か問題があると、皆で励まそうとする。彼のための晩餐会は何度か聞かれたが、<木曜のタベ>という催しはおおがかりなものになった。

ミス・コリンズは、動物園に行っただけで、彼が明日の夜成功するために行くことを承諾した。酒をやめて貰いたいと言う。彼は二十年間酔っぱらって暮らした。火は燃え尽きた、やり直そうと言ったが共通点もないのに何をするのか。やり直すには年がいき過ぎている。せめて、七、八年なら可能性はあった。彼が立ち直っても立派な地位を見つけることが重要だ。

ブロツキーはミス・コリンズと寝たいと言う。肉体は老いぼれたが、その行為を想像している。音楽は慰めに過ぎない、彼女は音楽のようなもので慰めになってくれる。

ブロツキーは犬の埋葬で墓地へ行くので、墓地で会いたいと頼む。ミス・コリンズに遅すぎる、二十年たっている、酒をやめてからとんでもない服装をしていると言われる。すすめられて着ていると答える。

ブロツキーについて、パークハーストは、ミス・コリンズの味方をして悪口を言う。ミス・コリンズは、口を開く権利はないとたしなめる。言い争いはしても二人は愛し合っている。

ブロツキーは死んだ犬に音楽を聞かせてやりたくて、ライダーに頼む。ライダーは墓場の近くにある小屋にある練習用のピアノで練習する。この音を聞き、埋葬されたと感謝する。

ブロツキーは酒を絶っていたが、精神的打撃を克服するために少しだけウィスキーを飲む。ホフマンはそれを認める。ブロツキーは酔って自転車に乗り車にひかれる。医師が傷を見て足を切断する。つけていた木の義足を切る。たまたまあったアイロン台を義足がわりに使う。見事な演奏をするが、夢中になりひっくり返り倒れる。

演奏は失敗に終わる。ミス・コリンズは、ブロツキーは人生を無駄に過ごさせた。自分の傷ばかり気にかけている、全てを捧げようとしたが興味を示さなかったと言う。正統派の指

揮者になれない、本物の音楽家ではなかったと言う。ミス・コリンズは去る。ブロツキーは聖ニコラス施療院に運ばれる。

町の人々の助力があったが、二人はお互いに思いあつたが分かれる。ブロツキーは酒で失敗し酔っ払っている。コンサートに向け、酒を絶ち練習に励んだが、少しの酒に人生を台無しにする。ミス・コリンズは何度も我慢し、耐えてきたが最後の機会を壊した彼を許さず放って行く。

ほかの町で失敗した二人が再起を期してこの町にやってくる。町の人々は二人を手厚く持てなす。しかし、酒に溺れるブロツキーは失敗し、二人は別れ、町の人に見放される。

(4) ライダーとクリストフ・ローザ

画家と名作曲家が亡くなり、人々は不安になっていた。その時、クリストフはやって来た。町の人々はほめ、追従を言い、教示と指導を仰ぎたいと言った。もてはやし意見を主張させた。半年に一度コンサートホールで講演させた。彼はプロのチェロ奏者で華々しい経歴をもっていた。スカジミエルツ・スタジンスキーの指揮で演奏した。

この町に来た目的は、ひっそり暮らすことで少し教えたいことだった。が、歓迎を受け自分の事や考えを吹聴するようになっていった。町の人々は才能を過大評価した。

町の一員になろうと、土地の事情に関心を持ち調べた。サトラー館のことも地元の実業家の一族についても詳しくなった。

この町の生まれで美人のローザ・クレナは有名人が集まると追いかけた。一年たたないうちにクリストフと結婚した。ローザは地位あるものを求め、クリストフを捨て、ブロツキーを狙うかも知れないと噂が立った。

現代音楽は複雑になっている。理解の範囲を超えている。町の人に理解はできないと言う。三和音の色づけは感情的価値を内在していると言う考えをライダーは三和音の色づけには感情的特質はないと否定する。また、カザンの循環的強弱法を放棄してはいけないと言う考えをライダーはカザンの場合形式的抑制はプラスにならないと否定する。

クリストフは仲間から散々な目に合う。町の寵児になったが、ローザに離れられ、音楽仲間から総すかんをくらう。町でひっそりのどかに暮らそうとした。町の事情も知ろうとし多くのことに通じた。が、町の過大評価と美人の求愛に圧倒された。町に入ろうとして入ることができなかった。

(5) ライダーとジェフリー・ソーンダース

ライダーのイングランドの学校時代の同級生だ。みすばらしい格好をしている。一度も結婚していない。娼婦なら大抵知っている。学生の時、人気者で学業・スポーツでの模範生で、いずれ総代と言われていた。が、中学五年で退学した。このことで人生は大きく変わる。

彼は思いやり深く接した。学校一の人気者だったが傷つきやすかった。

ボリスの話し相手になる。仕事を始めるころだと言う。土地勘があり道をよく知っている。

ミス・コリンズとブロツキーが言い合いになると、ブロツキーを非難する。彼女は彼を愛しているのでそれを許せない。ソーンダースはこういう男女関係が分からない。

ブロツキーが事故にあった時、彼を介抱する。救急車を呼ぶがコンサートホールの大行事で足りなくて来て貰えない。

ライダーの車に乗せようとするとうライダーは断る。車が必要な事態だ。事情を理解できず、いつものこととあきらめる。ライダーの性格は知っていてもその実状は分からない。

途中で退学し、その後人と人との関係を形成できなかった。人を表面的にとらえ、表面的に接する。

(6) ライダー

町にコンサートで呼ばれてくる。期間中のスケジュールに深く携わらない。人任せだ。その活動期間中、頼まれ受け入れ引き受ける。

一人の人に関わっている間に別の人の件に関わる。のべつ暇なく要望の処理にあたる。循環的に人が現れつながっていく。実行していて手を引きたくなることが何度もあるが、一度引き受けたことから安易に手は引かない。

頼まれた案件は主に家族のことだ。だからうかつに手は出せず、自分で解決することと諭す。また、事情を知らずに引き受け、町の人ひんしゆくをかうことまである。

人に尋ねながら、子供の前で話すなど思ったり買って与えた本を夢中に読む子供を叱ったりする。女性相手で、二人の女性にやり込められ、幼なじみのために言い返すこともかばうこともできない。

移動を頻りにするのに、地図を持っていない。わけの分からないまま移動する。すると何度も突然そこに知人が現れ目的地を示す。この町には一度来たことがあるが知らない土地であってみれば、このように移動する。女性の中にはそういう人と結婚する人もいる。ピアニストとして世界的に有名ということで何でもできると勘違いする。困ったこと悩んでいることを相談し解決して貰おうとする。

悩みはなかなか相談できない。町の人になら噂を立てられてしまう。同じレベル、風習にいたので解決法は見つからない。外から来た人にその心配はない。そして、有名だということで期待する。

音楽に関したことなので、シュテファンとブロツキーは解決して貰える。が、他の人は家族の関係についてのことなのでライダーに解決はできない。人柄から手を出してみても解決できないまま終わる。誠実な人柄で問題を放置できない。人々は頼み事の結果に関わらず、日常に戻り日常を継続して行く。ライダーに接触し、思うようになってもならなくても一人一人の日常を維持して行く。

ライダーは演奏のため練習をし、ホールで演奏しなければならない。そこに様々な要望が入り込み、練習は遠ざけられ最後になる。他所からやって来て、数日いて帰る非日常の人だ。この期間が、そして次々の期間が非日常だ。日常の中に非日常が入り込みかき回し、あげくの果てにはじき出される。非日常は日常に入り込めない。それでもライダーは次の演奏に向かう。前を向いて歩き出す。非日常を日常的に生きて行く。

四家族のそれぞれの課題に立ち向かい何とかしようと努力する。が、悉く失敗する。個人

的な問題だから仕方がないと分かっているにもかかわらず手を貸そうとする。失敗しても落胆せず後悔しない。分かっているでも手を差し出したのだから当然だ。更にそのためにできなかった練習が漸くできる。

この町に来た目的の演奏の準備はほかのことに時間をとられてできない。なんとか練習ができたのにプロツキーの失敗によって演奏ができなくなる。それでもプロツキーを恨まず、失望もしない。何をしにこの町に来たのか？ライダーは事態として受けとめる。一つ一つの雑事を真剣にこなした。結果は結果だ。終われば次の演奏に向かう。

一つの希望はシュテファンだ。力量を評価され自覚しピアニストへの道を歩もうとする。ライダーの後継者だ。

参考

『充たされざる者』 「充たされざる」ものは心が充たされないことだ。家族関係が円滑にいかないでいることを表す。

『アラビアンナイト』 枝分かれしていく構想到に類似する。

『日の名残り』 ドライブで空間的に移動するのに、ここでは時間的に螺旋状に移行する。

エピサイクロイド

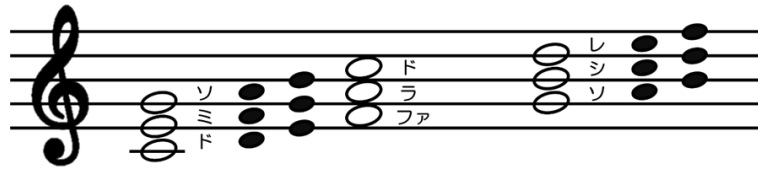
マレリーの《外 擺 線》

外サイクロイドとも言う。定円上を外接しながらすべることなく転がっていく動円の周上の定点が描く軌跡

三和音

ある音の上に3度ずつ2つの音を積み重ねた和音を三和音と言う。

特に重要な三和音はハ長調で表すと次のようになる。真ん中の音の差で響きが変わる。



ハ長調 I 主和音 IV 下屬和音 V 属和音

又、重ね方によって4種類に分けられる。①②が特に重要

- ① 長三和音 長調のひびき
明るい感じ 元気
- ② 短三和音 短調のひびき
暗い悲しい寂しい感じ
- ③ 増三和音 増三和音
- ④ 減三和音 減三和音